Stage Eight
「遙かなる日々」

Stage Eight

「あなたは臆病者だ、アルビレオ殿」
「この期に及んで何を言い出すかと思えば。命乞いをしたいのならばもっと気の利いたことを言ったらどうだ、サラディン？」
「あなたに命乞いなどしても無駄だろう。それにわたしはそんなことのために残ったのではない。あなたがラシュディ殿に命じられた本当の目的、それを足止めするためだ」
「まったく、本当におまえは腹立たしい人間だな。自分一人に正義があるような顔をして正論を吐く。自分だけがすべてを知っているような言い方をする。知っていたか、俺がおまえという人間を嫌っていることを？」
「わたしだけではないだろう。あなたは自分以外の全ての人間を嫌っている。エンドラ殿やガレス皇子、ラシュディ殿さえもだ。それにあなたに嫌われたところでわたしは痛くもかゆくもない。ただあなたがわたしへの腹いせにバルモアの町を焼き払うのではないかとそれだけを案じている」
「心配しなくてもおまえを石にしたらそうするつもりだったよ。十四年間も神聖なるゼテギネア帝国に逆らい続けたのだ。それくらいの報復は覚悟の上だろう？　だが俺が臆病者ならばおまえは何だ？　道理もわからず正義感ぶっているだけの愚か者ではないか」
「暗黒道に傾倒した師を諌めることもせずに盲目的に追従することがあなたの言う道理とやらか ――――うっ?!」
手足の冷たい感触が失せ、サラディン＝カームはすでに身体中のほとんどがまったく動かせなくなっているというのによろめいた、ような気がした。実際にはそうと錯覚しただけで、彼の身体は微動だにしていない。じきに口もきけなくなるだろう。兄弟子にかけられた石化の魔法は彼の一つひとつの細胞を石に変えてしまうのだ。彼の意識ばかりか生命活動が止まろうとしていた。
「どうだ、生きたまま石にされる感触というのは？　俺も他人にかけたことはあるが自分がかけられたことはないのでね。もしもおまえの石化が解除されることがあったら感想を聞かせてくれないか？

それと誤解があるようだからはっきりさせておこう。暗黒道はおまえの考えているような単純なものではないし、俺はラシュディさまに盲目的に追従しているのでもない。俺には俺の考えがあって、ラシュディさまに従っているだけだ。ふふっ、そんなことを言っても、もうおまえには聞こえなかったかな？」

応えようにももはや自由になるのは意識だけのようだ。その意識さえかすむ。彼の時間が止まる。

その後、ゼテギネア帝国は旧ドヌーブ王国の反帝国運動の指導者であったサラディンの死を喧伝し、大陸に最後まで残っていた抵抗はここに潰えた。

恐怖政治はさらに加速し、組織立てての抵抗が生まれるには、それから十年の歳月を要する。

旧ゼノビア王国騎士団を主体とする解放軍である。東の辺境、ヴォルザーク島から始まったその動きは、三ヶ月足らずのうちにゼテギネア最大の交易都市マラノを落とし、勢いはいまだ止まらない。

旧ドヌーブ王国の首都バルモアは西からライの海が深く入り込んだ半島に位置する。カストラート海よりも波の荒いライの海に浸食されたことで海岸線は複雑に入り組み、バルモア一帯を半島のように切り離してしまったのだ。海抜〇バームの土地は塩気が混じって、農業には向かない。加えて十年前の帝国の侵攻によりバルモア半島全土はバルモア遺跡と揶揄されるほど破壊されていた。

しかし旧ドヌーブ領の復興は旧ホーライ領よりも進んでいる。最後まで反帝国の先頭に立ったサラディンの意志と教えが人びとの心を挫けさせず、いまもなお励まし続けているからだと言われる。大陸一の賢者と言われたラシュディの弟子のなかで最も優れた妖術師だとされるサラディンは、同時に二〇年以上前に師より離反した硬骨漢でもあった。

風竜の月五日、グランディーナたちはバルモア半島の入り口アレルタの町に入った。カストロ峡谷からの街道はここから左右に海を見ながら北のワスカランに続き、さらに半島の各地に散っていく。

旧ドヌーブ王国の反帝運動が止んだ現在、帝国にとってバルモアの戦略的重要性はなくなっているはずだというグランディーナの推測どおり、アレルタに駐留している帝国軍も、質量ともにマラノやディアスポラに劣るものだった。

アレルタの町の中央広場には台座だけ残されている。その無惨な破壊の跡から、これがディアスポラで助けた彫刻家、バルカスが創ったサラディンの像なのだろうと推理するのは容易なことだ。

「そう言えば、バルカス殿はバルモアの出身だったはずだがどこに帰られたか聞いていないか？」

「確かカニャーテって町じゃなかったか。弟子がいるんで身を寄せるつもりだと聞いたな。かなり弱ってたし、あの歳だ、まだそこから動いてないだろう」

「カニャーテの町に行ってバルカス殿にお会いしたら遠回りになるのかな？」

「さあ、どうかな。俺はバルモアは初めてだからカニャーテがどこにあるのかわからん。おまえ、知ってるか？」

しかしカノープスに話を振られたのに気づかなかったようでグランディーナは周囲に目を配ったままだ。

彼女とランスロットはマラノにいた帝国兵から取り上げた鎧兜を身につけている。カノープスは鎧を着ない主義なので兜だけだ。加えてグランディーナはマラノを離れる前に髪を茶色く染め直してもいた。

「おい、聞いてるのか？」

カノープスが脇をこづくと彼女は振り返った。

「何の話だ？」

「カニャーテって町までどれくらいあるんだ？」

「カニャーテはバルモアの南にある町だ。ここからだとグリフォンを使っても一日以上かかると思う。そこに行くのか？」

グランディーナの最後の台詞はデネブに振られたものだが魔女は一同を振り返って答えた。

「そのことなんだけど、こんなところで立ち話も何だから宿に戻らない？」

「そうだな」

あいにくとアレルタの宿は大きくなく、二人部屋しかない。ランスロットとカノープスで一部屋を借り、グランディーナが床に寝ると言ってもう一部屋を女性陣が借りた。しかし二人部屋に五人も入ると狭苦しいのは否めないところだ。

「グランディーナ、あなた、バルモアの地理はわかるのかしら？」

「地図を描いておいた」

「あら、気が利いてるじゃない。見せて」

カノープスもつい案じ顔になってデネブの脇からのぞき込む。グランディーナなりに気を遣ったのだろうが相変わらず彼には難解な字だ。しかしランスロット

はもとよりデネブもアイーシャも意に介していないことが彼には悔しいところだ。

「いま、いるのがアレルタでしょ。バルモアは半島の先っぽでカニャーテはその手前にあるからだいぶ遠回りになっちゃうわね。それにカニャーテなんかに用はないわ。あたしたちの目的地はこっちの山の中よ」

「カリャオか？」

「とりあえずそこね。行ってからが問題なんだけどそれはカリャオに着いてから話すわ。サラディンとはどこで別れたの？」

グランディーナの指がバルモアの南にある小島を指した。

「そこに捨てられた教会がある。十年前は南側の対岸まで泳いで渡れた」

「そんなに近いのか？」

「渡るのに一晩かからなかったからそう遠くないだろうが、ダスカニアとゼルテニアのあいだより遠いかもしれない」

「どこだ、それ？」

「どちらもヴォルザーク島にある町の名前だ。わたしがここ数年住んでいたのがゼルテニアで、その対岸にあるのがダスカニアだ。船で一時間以上かな」

「十年前にそんな距離を泳いだって言うのか？」

「港と船は帝国兵に抑えられていた。見つからずに逃げ出すには泳ぐしかない。それに泳ぎは得意だ」

カノープスはうなり声を上げたが言葉が出なかったのでデネブが後を引き取った。ランスロットが「君は飛べるだろうけれど」と取りなしている。風呂にも入らない有翼人は総じてかなづちである。

「じゃあ、まずはそこから調べてみるべきね。でもサラディンがいない可能性は高いと思っておいた方がいいだろうけど」

グランディーナは無言で頷いた。

「なぁ、肝心なところを聞いてねぇと思うんだけど、そもそもおまえとサラディンてどういう関係にあるんだ？　単におまえが十年前にバルモアにいたってだけのことじゃないんだろう？」

彼女はとっくに床に腰を下ろしていたが、顔を上げ、また伏せた。そのまま黙りこくるかと思ったがそうはせず、言葉を選ぶように話し始める。

「サラディンは、私の命の恩人で、七歳ぐらいから、育ててくれた人でもある」

グランディーナはそこでいったん言葉を切ったが、皆が黙っているので同じ調子で話を続けた。

「けれど七歳以前の記憶は、私には曖昧だ。だから、話せないし、親のこともわからない」
「俺だって自慢じゃねぇがそんなガキのころのことなんて覚えてねぇぜ」
「そういう話じゃない。私は、その時に最初からやり直さなければならなかった。歩くことも話すこともできなくて、真っ先に知恵がついて、じきにいまの自分の状態がおかしいことを理解したが、結局、身体が追いつくのに一年かかった」
「それは要するに、赤ん坊のころからやり直したってことか？」
「そうだ」
ランスロットとカノープスは思わず顔を見合わせた。二人はアイーシャを見たが、彼女も知らなかったようで首を振る。
「何だってそんなことを？」
「それまでの記憶が封印されてしまったから、だと思うが、私も詳しいことは知らない」
「それならば、なぜサラディン殿は君を連れてバルモアから逃げなかったんだ？」
彼女は首を振り、言い訳めいた口調で言葉を継いだ。
「理由は、私にもわからない。ただ、彼は、私に一人で逃げろと言った。滅多なことでは前言を撤回しない人だ。それに、そんな日がいつか来ることは、前から言われていた」
「ラシュディに逆らって、反帝国活動までやってたんじゃ無理もねぇな。だけどどうしておまえなんだ？　ドヌーブに縁でもあったのか？」
「私は、ドヌーブ王家の人間ではないはずだ。だがサラディンにも、特に理由は訊いていない。それに自分の素性を知ることよりも、私には知らなければならないことがたくさんあった」
「たとえば？」
「星で方角を知る方法、野宿の仕方、文字の書き方や読み方、地図の読み方、動物や植物、魔獣について、いま、私が持っているほとんどの知識の基礎的なことをすべてだ。彼から教わらなかったのは武器の使い方ぐらいだろう」
「ずいぶん物知りなんだな、サラディンて」
「そりゃあ、一時は兄弟子を差し置いてラシュディの後継者なんてまで言われた人だもの」
「なるほど。で、明日はどこ行くんだ？　バルカスには結局会わねぇってことでいいのか？」
「彼に会うのはサラディンを助けてからでもいいん

じゃないの？　このあいだの話だと大したことは知ってなさそうだし、単にもう一度会いたいってだけなんでしょ？」

「まぁ、そういうところだろうな」

「じゃあ、続きはまた明日、カリャオに行ってからにしましょ。さぁ、ここは女の子の部屋よ、男性陣は出ていってちょうだい」

「おい、待てよ」

カノープスの抗議も空しく、ランスロットと部屋から追い出された。細腕なのになぜかデネブの力には時々逆らえない時があるのだ。

「続きは明日と言ったんだ。へたに波風立てない方がいいんじゃないか？」

カノープスは舌打ちしたが、その場で騒ぎ立てるようなへまはしなかった。

二人は部屋に戻って話し続けたが、隣室から声は漏れてこない。

「だからって、ああもったいつけられるのは俺は嫌いなんだよ。こっちが何も知らねぇと思って、奥歯に物が挟まったような言い方しやがる」

ランスロットは苦笑いを浮かべた。知らないのは事実だし、魔法の話題をこと敬遠するのはカノープスの方だ。デネブの言い方に難癖をつけるのは筋違いというものだろう。

「彼女がウォーレンより魔法について詳しいのは本当らしい。グランディーナもこの件に関してはデネブに任せているようだし、我々も黙って従うしかないんじゃないか？」

「それなんだよなぁ、気になるの。グランディーナがいつもよりおとなしいとこっちまで調子が狂っちまう。そう思わねぇ？」

「おとなしいと言うのかな？　わたしにはそうは見えなかったが」

「じゃあ、何だ？」

「自分を抑えつけているように見えた。本当は誰よりも飛び出していきたいのだろうにそれを我慢しているようにわたしには思えた。一人でいたらあのままバルモアまで行ってしまいそうにね」

「うーん、まぁ、それも否定しねぇけど。アルビレオもけっこうな曲者みたいだしな。だけどあいつもいろいろ話してないことがあるぞ。小娘一人にラシュディの弟子が二人も関わってるのはどう考えてもおかしいと思わねぇか？　それに七歳以前の記憶の封印なんて、あいつ、ガキのころに何をやらかしたんだ？」

「彼女自身も知らないのなら話しようがないだろう。赤ん坊からやり直したなんてよほどのことなんだろうが、サラディン殿を助ければもっとわかってくるんじゃないか？」

「いいや、デネブもウォーレンもそうだが、魔法使いっていうのは自分の持ってる情報を一度に出すなんてことは絶対にしねぇ。サラディンだってそういう奴かもしれねぇぜ？」

「会ったこともない人については話せないね。さぁ、明日に備えて寝るとしよう」

「本当に床で寝るの？　少しくらい狭くても平気だから、一緒に寝ない？」

アイーシャがそう言うのも無理はない。床に座り込んだままで寝ようというグランディーナは鎧兜を脱いだきり、あとは着の身着のままでいいと言う。毛布は手持ちのをかけるだけだ。

「この方が慣れてる。私のことは気にしなくていい。アイーシャこそ三日も野宿で疲れただろう」

「私は大丈夫よ。いつも毛布を多めに使わせてもらったし、みんなに気を遣ってもらっていたからそんなに疲れてないわ。ねぇ、だから、もう少し話してい

てもいい？　サラディンさまってどんな方だったの？　あなたが前に言っていたいちばん大事な人ってサラディンさまのことなんでしょう？」

「よくそんな前の話を覚えているな」

「あなたと再会した時に思い出したの。ねぇ、どんな方なの？」

グランディーナはわずかにうつむき、微笑んだ。

「カノープスもランスロットもこういうところに気がつかないのよねぇ」

デネブがしみじみとつぶやく。

「どういうことですか？」

「どんなに強くたってうちのリーダーも女の子だってことよ。サラディンとどんな関係かなんて当人に訊けばわかることじゃない？　そんなことよりどんな人だって訊かれる方がずっと嬉しいんだってことがあの二人にはわからないのよ。だからカノープスっていまだに彼女の一人もいないんだわ。鈍いようだけどギルバルドはそういうところはそつがないわよ。彼女がいる人って違うわよ、やっぱり」

デネブの言い分にアイーシャは目を丸くしたが、グランディーナは笑い出した。

「笑い事じゃないわよ。あなたたち、そういう気の

利いた男を見つけなくっちゃ」
「二人にそんなことを言ったら、どんな顔をされるかな？　それにランスロットはやもめだ。あなたが言うほどわかってなくはないだろう」
「あら、それは初耳。あの人、奥さん、いたの？」
「ヴォルザーク島を発つ時にそう言っていた。親族は帝国に処刑されたから、ほかに別れを惜しむような身内はいないそうだ」
「あらまぁ。人は見かけによらないものね。でも、人の好みはそれぞれだもの、ああいう男がいいって女はいるわよね。だけど、ランスロットのことは見直しちゃったわ」
「そこらへんにしておいたらどうだ。二人とも隣の部屋で耳を澄ましているかもしれない」
「そうね。人の悪口を言うとどんどん心がぶすになっちゃうのよ」
「それよりもサラディンの話だったろう？」
話題が変わったのでアイーシャが安堵したように頷いた。
デネブがその髪をさも嬉しそうに撫でる。彼女の亜麻色の髪は細くて柔らかい。仕事の邪魔にならないようにいつも二本の三つ編みにしているが、ほとんど癖が残らないほどだ。
「サラディンは、厳しくて優しい人だ。教え上手で、一つを教えておしまいということは決してなかった。一つ教えたら二つ、二つ教えたら四つ、そうしなければ私はいつまでも赤子みたいな知識しか持てなかったろう。そうなれば、一人でバルモアから脱出することもかなわなかったかもしれない」
「その日が来るのを知ってたからよ。知っていたから無駄な行動はできなかったのね」
「きっとそうだと思う。でも無駄なことを嫌ってたわけじゃない。私が話を寄り道させても怒られなかったもの。それに何でも知ってるんだ。私が訊いたことに答えられなかったことがない」
「グランディーナは、サラディンさまのこと、尊敬しているのね」
しかし彼女は首を振った。
「彼のことはそんな単純な言葉では割り切れない。私がいま、ここにあるすべてだから。何者にも代えられない、彼を助けるためにここまで来た。この十年間、彼のことを考えない日なんて一日もなかった」
「アヴァロン島に来たのはバルモアを脱出した後でだったの？」

「そうだ。あのころ、帝国の支配下に入っていなかったのはアヴァロン島だけだった。それにフォーリスさまとサラディンは旧知の仲だ。フォーリスさまには具体的にではなくても事前に私の話はしてあったと思う。それでもアヴァロン島までは一人で行った。せっかくサラディンに教わったことが全然わかっていなくて、回り道ばかりしていたから、半年以上もかかってしまったけれど」

「お母さまとサラディンさまがお知り合いだったの？　そんなこと、初めて聞いたわ」

「たぶん、フォーリスさまはあまり人には話していない。サラディンがラシュディに逆らったのは二〇年以上前だ。フォーリスさまと知り合ったころにはそれを公言するのは危険なことだったと思う。私がアヴァロン島に行った後は、私がバルモアから来たこともサラディンのことも、誰にも言っていないはずだ」

「そう言えば、お母さま、あなたのことをずっとサーラと呼んでいた」

「私が教えなかったからだ。解放軍として、アヴァロン島に行った時に名前のことも含めてフォーリスさまには話すつもりだったが、かなわなかった」

フォーリスの死を思い出したのだろう、グランディーナの表情が沈む。

アヴァロン島にいたころ、彼女が母にだけは心を開いていたことはアイーシャもよく覚えている。母も、グランディーナがロシュフォル教会の人間でもないのによく庇ったり気を遣っていたが、その裏には皆に言えない事情があったのだ。

「ごめんなさい、グランディーナ」

「何の話だ？」

「私、あなたがそんなに大変な思いをしてアヴァロン島に来たなんて知らなくて、お母さまに贔屓（ひいき）されてるってずっと恨んでた」

「あなたに謝らせるために黙っていたわけじゃない。フォーリスさまに限らず本当のことは知らせない方が安全だと思った。それに私が選んできた生き方だから、あなたに同情なんてされたくない」

そう言ってグランディーナが顔を背けたのでアイーシャはほんの少し狼狽えた。その肩をデネブが優しく抱く。

「同情ってね、優越感の裏返しなのよ。自分の方がましだと思ってるから同情するの。でもそれは、本当の優しさじゃないわ。だって、同情される方からしたら、これほど人を馬鹿にした話ってないと思うもの」

「ごめんなさい、私、そんなつもりじゃなくて」
「それだけ、あなたがお母さんに可愛がられたってことよ。そのことをあなたが引け目に思う必要なんてないのよ。だからってグランディーナに謝る必要もないの。いい？」
「はい、デネブさん」
「あなたもいつまでも子どもっぽいことしないのよ。アイーシャをいじめたら、あたしが許さないから」
「わかってる」
彼女は頷き、アイーシャにかすかに笑いかけた。けれど握り締められた拳はその笑顔とは裏腹の感情を伝える。あの時と同じようにグランディーナが自分の手を傷つけてしまいそうに思われて、アイーシャは思わずその手を取った。
グランディーナもそのことに気づいた様子で苦笑いを浮かべる。
「んもう、二人だけの世界に入ってお姉さんを除け者にしないでくれない？　女の友情に秘密はつきものだけれど、お姉さん、寂しいわ」
「ごめんなさい、デネブさん！　私、そんなつもりじゃなかったのに」
「いいのよ。あたし、あなたのことはよくわかってるもの、あなたはそんなことをする子じゃないわ。でもね、気をつけなさい、アイーシャ。女の世界は一歩間違うと情念と憎悪の入り交じる修羅の世界よ。司祭のあなたには関係ない話かもしれないけれど」
「いいえ、私も少しぐらい知ってます。ロシュフォル教会だってきれいごとばかりじゃないですから。お母さまが大神官になったことでずっと司祭でなければならなくなったっていう方もいました。私、その方に何も言えなくて、謝ることもできなくて。お母さまが大神官として若すぎることは聞いていたけれど、お母さまが誰よりも頑張ってることも知っていたのに、悪いのはお母さまじゃないって言えなくて」
「あなたも若いのに苦労してるのねぇ。まぁ、確かにあれは異例の人事だったものね。だけど、あなたのお母さんだからあの非常事態を乗り越えられたのよ。凡百の司祭じゃお話にもならなかったでしょうよ」
「そんなに大変なことがあったんですか？」
「そりゃもう、ロシュフォル教会始まって以来の危機だったわね。でも偉いわ、アイーシャって恨み言なんて口にしないんですもの。解放軍のなかでだっていろいろあるんでしょ？　溜まったらあたしに吐き出したっていいのよ。お姉さん、いつでも聞いてあげる」

「ありがとうございます。でも、私、そういうことを口にするのが怖いんです。口にすることができなくていっぱい溜め込んで、嫌なことばかり考えてて、私、デネブさんが言うようないい子でも何でもないんです。デネブさんの前でいい子を演じてるだけなんです」

そう言ってからアイーシャは恥ずかしさのあまり穴に入りたいような気持ちに駆られた。解放軍のなかでもいままでも、いちばん仲のいい二人にこんなことを口走ってしまうなんてどうかしている。

しかし魔女は艶然と微笑んでみせる。同性から見ても見とれてしまうような、世界中のどんな美もこの微笑みの前では色褪せてしまいそうな笑顔を浮かべた。

「きれいなだけの人間なんておもしろくも何ともないわ。見た目だろうと心根だろうと、清濁併せ持つから人間ておもしろいのよ。きれいなだけ、汚いだけの存在なんて神だけでたくさん、そんなの人間じゃないわ。そう思わない？」

「あなたにそう言われると逆らえないな」

グランディーナが苦笑いして答えたが、アイーシャは頷くことも首を振ることもできず、言ってみれば口を開けてぽかんとしていた。

デネブは時々、彼女には思いもつかないようなことを口にする。「神だけでたくさん」だなんて、誰のことを指しているのか見当もつかない。

彼女に相槌を打つグランディーナもそうだ。デネブはああ言ったけれど、この二人の方がよほど秘密を抱えているようにアイーシャには見える。それも彼女には決して届かないところにあるような秘密だ。

だが、次の瞬間にはデネブはもういつもの彼女、アイーシャと仲のいい魔女に戻っていた。

「さぁ、二人とも、話が尽きないのはわかるけど、そろそろ休んだらどう？　そんなに話したいことがあるのなら、いっそ一緒のグリフォンに乗ってくれれば良かったんだわ」

「私がグランディーナにお願いしたんです。アヴァロン島で皆さんに迷惑をかけてしまったからグリフォンに乗るのに慣れておきたいって」

「あなたって努力家よね。あたし、そういうところも好きだわ。もう、あなたの爪の垢を煎じて飲ませたい人が大勢いるのよ」

「そんなことありません。私なんて、皆さんの足手まといにならないようにするのが精一杯です」

「あなたは足手まといなんかじゃない。自分を卑下することはない」

「そうよぉ」
デネブが笑いながらアイーシャの頭を軽くたたく。
グランディーナが立ち上がり、角灯(らんたん)を消した。
けれど、彼女がいつまでも眠れないでいることにアイーシャは気づいていた。
自分もルテキアからアヴァロン島に渡る船の中でまんじりともせずに夜明けを迎えたので、彼女にはその気持ちがよくわかった。ましてやアイーシャは母に一目会いたいという願いもかなわなかったのだ。せめてグランディーナにはそんな思いを味わってほしくないと思う。
アイーシャは祈るような気持ちで寝床の中でそっと手を組んだ。
(サラディンさまを無事にお助けできますように。私たちがどうか間に合いますように)
そう彼女が祈る相手はいまも亡き母にであった。

複雑に海と陸とが入り組んだバルモア半島を眼下に見下ろしながら、グランディーナを先頭に一行はアレルタから西北西にあるカリャオの町を目指した。
カリャオ一帯は険しい山岳地帯で、半島の南半分を覆っている。半島が海の浸食で切り離される前は大陸の山脈と繋がっていたのだろうと推測できる地形だ。
アレルタとカリャオを結ぶほぼ中間にワラスという町があるのだが、グランディーナはそこには寄らずにカリャオに急いだ。途中での休憩も山の中に降りただけだ。
しかし、結局、カリャオに着いたのは夕方になってからで、陽は山の背にほとんど隠れていた。
「山の中の町にしちゃあ物々しい構えだな。こんなところに要塞なんかなかっただろう?」
「要塞などはないが、カリャオはドヌーブ王国であってドヌーブ王国でない自治都市だからだろう」
「ああ、シャローム地方のアナトリアみたいなものか。あそこもゼノビアであってゼノビアでなかったのは有名だからな」
「アナトリアとは懐かしいな」
入るのに手こずらされるかと思っていたら、帝国兵の鎧兜が効いたのか、五人はすんなりカリャオの門をくぐることができた。
五頭のグリフォンはカノープスの提案で山に放すことにした。生き餌が中心のグリフォンには無理をして生肉を調達するより、山中で獲物を捕らせた方が早いだろうと言うことだった。

町の規模はアレルタと同じくらいで、中央に広場があり、そこから四方に主要な道路が延びているという構造も似ている。そのおかげか、宿を探すのも手間取らないで済んだ。

「何てことはない平凡な町に見えるけど、こんなところに何があるんだ？」

カリャオの宿では六人部屋が取れたのでカノープスは宿に入るなり待ちかまえたように訊く。三人ともまだ兜を脱いでもいない性急さだ。

「まぁ、正確にはカリャオであってカリャオでないんだけれど、明日が満月なのは知ってるかしら？」

グランディーナが頷き、ランスロットとカノープスはそれぞれ、二ヶ月以上前のジャンセニア湖での顛末を思い出す。

しかしゼテギネアの暦は太陽暦なので、月の満ち欠けにこだわるのは占星術師や魔法使いばかりだ。

「あなたの求めているサラディンの石化を解除できるただ一つの物は、光のベルという神聖呪具なの。それはユリマグアスという狭間の町にあって、明日の深夜にこのカリャオと重なるわ。ただし、ユリマグアスには神をも殺す獣、スコルハティって名前の強力な門番がいてそれをどうにかしないと入ることもできないの。それにユリマグアスがカリャオと重なっているのは明後日一日限り、日が変われば別のところに移動しちゃってバルモアから離れるから気をつけてね」

「わかった」

「おまえ、本当にデネブの言うこと、わかってんのか？」

「明日の真夜中にカリャオと重なるユリマグアスに行き、門番をどうにかしてその日のうちに光のベルを手に入れてくればいいのだろう」

「お利口さんね、グランディーナ、そのとおりよ。どうしてカノープスにはわからないのかしら？」

「いきなり光のベルだのユリマグアスだの狭間の町だの強力な門番だのなんて言われて頷けるかよ。詳しく説明しろ」

「デネブがそうしろと言うのに知らない言葉にいちいちこだわってどうする。私が案じているのはユリマグアスと重なった時にどうやってそこに行けるのか、それが自分にわかるのかということだけだ」

「神をも殺す門番はどうするんだよ？」

「何とかなるだろう」

カノープスは開いた口がふさがらず、助けを求めるようにランスロットを振り返ったが、話がまったく見

えていないことは彼も、実はアイーシャも似たようなものだ。
「まさかと思うがデネブ、我々にそのスコルハティと戦えと言うのか？」
しかし二人にとって腹立たしいことに、魔女は極上の微笑みを浮かべながらこう答えた。
「あら、スコルハティはあなたたち二人がかかったって勝てる相手ではないわ。ここは出しゃばらないでおとなしくグランディーナに任せるのね」
「デネブさん、でも、それはとても危険な相手なのではないですか？　いくらグランディーナが強くても何とかなるような相手なのでしょうか？」
そう言ったアイーシャの顔色は血の気が引いて真っ白だ。そのことに気づいたようでグランディーナがわずかに微笑む。
「大丈夫だ、アイーシャ。
だがデネブ、私も後の保証はできないぞ」
「ご心配なく。まぁ、こっちも何とかなるでしょ。それにユリマグアスと重なる時にはあたしが教えてあげるし、もちろん連れてってあげるわよ。あなたが心配することはないんじゃないの？」
グランディーナは頷いて、いまだ全然納得していないランスロットとカノープスに向き直った。
「後のことはデネブに任せる。あなたたちは彼女の指示に従ってくれ」
「待てよ。おまえとデネブだけわかっていられても納得できるか。
デネブ、どういうことなのか説明しろ。だいたいそれだけの話で、はい、そうですかなんて言えると思ってるのか？」
「わたしもカノープスに同感だ。だが、それよりも気になるのはその門番だ。まさか、後のことというのはグランディーナが殺されるのを前提にしているわけではないだろうな？」
「あなたの勝算はどうなのよ？」
デネブはグランディーナを見たが、彼女は「任せる」と繰り返す。その表情がいつにも増して感情を押し殺しているように見えるのは、いったいどういうわけなのか、彼らには見当もつかない。
「どうせ明日いっぱいは時間があるのだろう。アイーシャも含めて三人が納得できないと言うのならあなたから説明してやってくれ。どちらにしても私のすることは決まっているし、これ以上あなたに説明してもらう必要があるとも思わない」

デネブは少しだけ頬をふくらませる。
「じゃあ、あなたは明日はどうするつもり？」
「休む。余計な力は使いたくない」
そう言うと、彼女は腰の刀を外し、抱きかかえるようにして窓際の床に座り込んだ。なぜそれが寝台の上でないのか、ランスロットもカノープスも追求することも忘れていた。
「しょうがないわね。グランディーナがそう言うから説明してあげるわ。それで、あなたたち、何を聞きたいの？」
「最初から全部話せ。その上でどうやってその門番を倒せるのか聞かせてもらおうか」
デネブは丸く開けた口を手で隠した。その拍子にとんがり帽子が後ろにずり落ちたのでかぶり直す。何てことはない帽子なのだが、彼女はその形とかぶり方にひとかどならぬ情熱を傾けているのだ。
「あなた、本気で言ってるの？」
「申し訳ないが我々は魔法にまつわることには疎い。グランディーナのようなわけにはいかないよ」
「私も魔法のことはまったくわからない。私はその器ではない」
「アナトリアでも魔女ババロアを相手にそのようなことを言っていたな。だがアラディもわたしも、君とババロアとの話がまるで理解できなかった。それもサラディン殿に教わったことなのか？」
「たぶん、そうだ。サラディンは、私が、魔法を使えないと言った。私には、その、器がないと。知識としては知っていても、所詮それだけのことだ」
「ますますわからねぇな。おまえの言ってる器というのは俺にだってあるとは思えねぇ。俺だけじゃない。有翼人はみんな魔法を使えないぞ」
「私も、理屈がわかってるわけじゃない。それに、器は器だ。私にはうまく説明できないし、それ以上のことは聞いていない」
「まるで雲でもつかむような話だな。おまえにはわかるのか、デネブ？」
「わかるけど、あなたたちの聞こうとしてることとは全然関係ないわよ。何だったらサラディンを助けて、彼に訊いてみたらいいんじゃないの？　それとも先にそっちのお話？」
「いいや。そんな話はいつでも聞ける。先に明日の真夜中、カリャオで何をするのか話せ」
「あなたって意外と理屈屋さんなのね」
「ほっとけ」

デネブは笑いながら手近の寝台に腰掛ける。アイーシャはすでにその向かいに座っていたが、ランスロットもその隣の寝台に腰を下ろし、カノープスだけ腕組みをして立ったままだ。

「じゃあ、最初から話すわよ。サラディンがアルビレオにかけられた石化を解くには、光のベルという神聖呪具が必要なの。石化というとコカトリスが有名だけど、アルビレオの魔法はちょっと特別で光のベルじゃないと解除できないのよ。何でも身体の細胞が石にされてしまって、石そのものになっちゃうらしいわね。かける方もそう頻繁に使えないらしいんだけど。光のベルはこういう状態を何でも解除できる凄い物なんだけど、それだけに大事に隠されてるってわけ。これがあるのがユリマグアスって町なんだけど、この町は時間と空間の狭間を漂っている町で、毎年、いまの時期になるとカリャオ辺りにやってくるのよ」

「何でそんなことがわかるんだ？」

口を挟んだカノープスに案の定、デネブはいい顔をしなかった。

「ユリマグアスについての記述を集めるとそういう結論になるの。一晩だけ町と重なる幻の町には空想をかき立てられた人も多いでしょうからね。続きを話してもいいかしら？」

「いや、光のベルについてはいいだろう。だけど、そんな時間と空間の狭間なんて目にも見えねぇものが本当にあるのか？　そんなところを漂ってる町なんてそれこそ眉唾物にしか聞こえねぇ」

「んまぁーっ。あなたって理屈屋さんなだけじゃなくて石頭だったのね。これだから嫌なのよ、魔法のことを知らない人と話すのは。自分の目に見えるものだけ、目に見える世界だけがあると思ってるの？　オウガバトルはお伽話だとでも？　あなたたち、ポグロムの森で悪魔に会ったんでしょ？　彼らがどこから来たと思ってるのよ、魔界に決まってるじゃない」

思わぬデネブの剣幕にカノープスの方がたじろぐ。

「わかったよ。話の腰を折って俺が悪かった。続けてくれ」

「いやよ」

「えっ？」

デネブがそっぽを向いたので、さすがにカノープスも焦った。

「ねぇ、グランディーナ、あなたも聞いてたんでしょ？　何にも知らないくせにカノープスったらいちいち ――――」

「どうした？」
「寝ちゃってるわ」
舌の先まで出かかった「嘘だろう」という言葉を呑み込んでカノープスが窓際をのぞき、ランスロットとアイーシャも続く。
しかし、デネブの言うとおり、グランディーナは曲刀を抱きかかえて床に座り込んだままで眠っていた。
「こいつ、こんなに寝つきが良かったっけ？」
カノープスはつい声を潜め、アイーシャも倣う。
「昨日はいつまでも眠れなかったようなので、眠たかったんじゃないでしょうか？」
「いつまでもって、まさかと思うけど、あなたまで起きてたの？」
「いいえ、私はすぐに寝ました。そんな気がしただけなんですけど」
「デネブ、ユリマグアスについての続きはまた明日にしてもらってもいいかな？　彼女の眠りを妨げるのも気の毒だ」
「あたしはかまわないけど、カノープスは？」
「うーん。まぁ、寝てるところを邪魔するのも悪いからなぁ」
すると、グランディーナが突然目を開けた。
「私のことならかまわない。話を続けてくれ」
「あら、起きてたの？　それなら黙って聞いてないでよ、意地悪いわね」
「何と言って切り出そうか考えてた。途中で目が覚めたのは本当だ」
「だが、君が寝ていたのを邪魔したのだろう？」
「目が覚めたのはあなたたちの気配を感じたからだ。一度眠ってしまえば、あれぐらいの話し声では目は覚めない」
「そうなの？　じゃあ、カノープスが言ってたことも聞いてなかったのね？」
「何かあったのか？」
「俺が悪かったって言ってるだろう。話を続けてくれよ、デネブ」
「本当にそう思ってる？　あたしの話にけちつけないって約束できる？」
「わかった。約束する」
カノープスは大真面目な顔で宣誓したが、内心では馬鹿馬鹿しさでいっぱいだ。しかしそんなことがばれたらデネブにまたへそを曲げられるし、そうなったら最後、彼女はもう話したがらないだろう。こういう時には聞き役に徹し、上手く立ち回っているランスロッ

トが恨めしい。
「ここであたしがあなたの言うことなんて信じられないわ、って言ってもいいんだけれど、それじゃおとなしく聞いてくれてるアイーシャがかわいそうだから、話してあげるわ」
「ありがとうございます、デネブさん」
ランスロットはいいのか、と言いたい気持ちをカノープスは堪える。
「でも顔色が良くないようよ。グランディーナのことがそんなに心配？」
「はい、とても」
「あたしの言うことが信じられないの？」
「そんなことありません。でも、何て言ったらいいのか、とても不安なんです。私にできることが何もないから、どうしていいのかわからないんです」
「あら、それはあたしが説得できる領分じゃないわね。グランディーナ、どうせまだ起きてるんでしょ？」
アイーシャを説得してあげてくれない？」
そう言われて、彼女は曲刀を脇にのけて寝台に寄りかかった。
「私もいまは大丈夫だとしか言えない。この十年間、私はサラディンを助けるために生きてきたから、そう簡単には死ねない。私が言えるのはそれだけだ」
「本当に？」
「どんな形でも生きてサラディンにもう一度会うこと、それだけが私の願いだったから。いつも、いまも、それだけが私の望みだから」
グランディーナが立ち上がり、そっとアイーシャを抱きしめた。そんな時の彼女は限りなく優しい顔をしている。彼女にとって、アイーシャの存在は解放軍のなかでも特別なのだ。
「死なない？」
同じ言葉を木偶のように繰り返すアイーシャに彼女は静かに頷いた。
アイーシャが目の下をこする。
彼女の司祭としての腕前はすでに解放軍のなかでも群を抜いている。大神官の一人娘であり、ロシュフォル教の聖地アヴァロン島の出身で、しかも大陸で修行したとあっては同い年のミネアはおろか、たいがいの司祭たちよりも頼りにされ、リーダー格のマチルダでさえたまに意見を求めるほどだ。けれど、アイーシャは決して奢らず、鼻にかけず、その控えめで何にでも一生懸命なところが「さすが大神官の娘御は違う」とまで言われている。

だが本当の彼女はまだ十九歳の、ほとんど教会の中しか知らない箱入り娘なのであり、周りの期待と人望と羨望も、重圧のようにしか感じていないのかもしれなかった。

その様子を見ていると、さすがのカノープスもグランディーナに再度確かめる気にはなれなかった。

だが彼には彼女の弁もデネブの言うことも容易に信じられない。確かにグランディーナは強い。その剣は解放軍最強と言ってもいいだろう。だからといってランスロットと二人がかりでもかなわないほどだとは思えないのだ。

「ユリマグアスのこと、まだ聞きたいの？」

「そのスコルハティって門番て、どんな奴なんだ？単に獣と言ったっていろいろな奴がいるだろう？魔獣とかに近いものなのか？」

「そうねぇ。あんまり記述はないんだけど、スコルハティは小山のような大きさの狼で、心正しき者には道を譲るとも言われているようね」

「それは戦わないでも済むってことか？」

「そういう場合もあるかもしれないってだけよ」

「そいつを先に言えよ。俺はてっきり、必ず倒さなきゃいけねぇものだと思ったぜ」

「わたしもだ」

「実際はどうだかわからないわよ。あたしだって会ったことなんてないんだから。無事に通してくれたら万々歳って感じかしら。まだ何かあるの？」

「あまり今度の件とは関係がないかもしれないが、ユリマグアスという町はなぜそのように隠されているのか教えてくれないか？」

「さぁ、あたしも知らないわ。ただ、そこにあるのはとても貴重な物ばかりだから、神が悪用されるのを恐れたという説はあるわね。あのファイアクレストだって一時はユリマグアスにあるんじゃないかって疑われてたほどだもの。こっちは結局、眉唾だったんだけど」

「何だ、そのファイア何とかって？」

「ファイアクレスト、伝説の炎の騎士レクサールの紋章よ。世界を丸ごと変えてしまうほどの力を持つって言われてるんだから。知らないの？」

「レクサールの名前ぐらい俺だって知ってるよ。ガキのころに聞いただけだから忘れてたんだ。まさか、レクサールも実在の人物だなんて言い出すんじゃないだろうな？」

「それはどうかしらねぇ」

デネブが思わせぶりな顔つきで笑ったのでカノープスはまたしても突っかかりかけたが、グランディーナが一音一音区切るように伝説の騎士の名をつぶやいたので、その方が気になって振り返った。

「何だ、おまえもレクサールに興味があるのか？」

しかし彼女はこめかみに指先を当てて驚くほど真剣な表情で考え込んでいる。もちろんカノープスだって彼女が好奇心からその名をつぶやいたなどとは思ってもいない。

グランディーナはその腕に、アイーシャが心配そうな顔で手を置いたのも気づいていない様子だ。

ランスロットもデネブもいつの間にか話を止めて様子をうかがっている。

「れ、く、さ、あ、る？」

その声音も表情も、見慣れた彼女のものではなかった。まるで知らない少女がそこにいるようだ。その存在もあまりに頼りない。

カノープスはとうとうグランディーナの左腕を取った。彼のなかでポグロムの森で突然現れた霊とともに皆の前から姿を消した彼女が、あの時、どんな表情をしていたのか、どうしても思い出せない苛立ちとともにだぶったのだ。

「カノープス？　どうした？」

その口調が思っていた以上にいつものグランディーナで、彼は安心すると同時に腹が立った。

「どうしたじゃねぇ。どうしたのか訊きたいのはこっちの方だ。レクサールって名前がどうかしたのか？」

彼女は首を振った。その時だけ、さっきの面影が横切る。

「私にも、わからない。思い出せたかと思ったが逃げられた。昔、そんな名前の知り合いがいたような気がしただけだ」

「その割にはずいぶん真剣に考え込んでいたぞ」

「記憶が曖昧なせいだろう。そのくせ、いまみたいに突然湧き上がって消えてしまう。まるで蜃気楼でも追いかけているみたいだ」

「たまに英雄にあやかった名をつけることはあるそうだ。レクサールという名はさすがに時代がかっているが、君はそういう人物にあったことがあるのじゃないか？」

グランディーナはその前よりも弱々しく首を振る。その時だけ見知らぬ少女の面影がよぎる。

「たぶん、そうじゃない。でも、わからない」

「わからないなら無理に答えなくてもいいさ。ただ、ポグロムの森の時みたいにおまえに突然消えられたんじゃかなわねぇからな」
その時に解放軍にいたのはランスロットだけだ。突然消えた彼女のことで互いに一触即発の雰囲気になったことを思い出したのか、彼は苦笑いを浮かべた。
「あれはポルトラノによるものだったろう。ここで誰が私を連れ出すと思うんだ？」
グランディーナはそのことを知らないせいか、憎たらしいほど冷静な口調である。
そしてカノープスは彼女の表情など見られなかったことをも思いだした。
「たとえばアルビレオとかな。その師匠なんか出てきたらどうするんだよ？」
「彼らが私を召喚するのなら却って好都合だ。アルビレオだろうとラシュディだろうとそのまま首をかききってやる。だが間違ってもそんなことはするまい」
答えたグランディーナの表情にもう弱々しさはない。カノープスは手を離し、彼女をしばらく睨んでいたが、その話題を自分から打ち切ることにした。
それを見て、アイーシャがこっそり安堵のため息を漏らすのが彼にはまた癪の種だ。
「なぁ、デネブ、ユリマグアスに住んでる奴はいるのか？」
「さぁ、住人がいるという記述は読んだことがないわね。たとえいたとしても月が変わればどこかへ行ってしまう人たちだわ。気にしてもしょうがないんじゃないの？」
「そうだな、わたしも住人のことは気になっていた。人がいたら光のベルも探しやすかろうと思うんだが、それは大丈夫なのかと心配になったのでね。それに君の話を聞いていたら、子どものころに聞いたお伽話を思い出したんだ。天空の島も天空の三騎士も実在すると言うのだろう？」
「悪いけど、そういう話はサラディンに訊いてくれない？　あたしは呪具には興味があるけれど天空の島なんてものには興味はないのよ。でもあなたたちの言うとおり、住人がいれば光のベルは探しやすそうね」
「なるほど。
カノープス、今日はわたしはそろそろいいと思うんだが、君はどうだ？」
「俺もかまわねぇ。アイーシャはどうなんだ？」
「私は、大丈夫です」
その表情を見る限り、アイーシャはちっとも大丈夫

そうではないのだが、ランスロットもカノープスもそんなことを追求するほど野暮ではない。それにいくらユリマグアスや光のベルのことについて訊いても、最終的にはスコルハティなる門番をどうすべきか、というところに行き着いてしまうのだから、彼女の案じていることと二人の案じることは結局同じものなのだ。

「ありがとう、デネブ。君にばかり長いこと話させて悪かった。今日はもう休んでくれ」

「あら。あなたの口からそんな台詞が聞けるなんて思わなかったわ。やっぱり奥さんがいたって人は気のつくところが違うものね」

「そんな話を誰に聞いたんだ？」

思ってもいなかった話題を振られて、ランスロットは内心かなりたじろいだ。

しかし知ってか知らずか、デネブの口調はいつもと変わらない。

「みんな、知ってることでしょ？」

「それもそうだがね、最近は知らない者の方が多いと思っていたからな。それに亡くなった人のことなど話しても楽しいことじゃないだろう。ところがわたしときたら、彼女は二年も前に亡くなったのに、いまでもどこかへ出かけているのだと錯覚することがあるんだよ。彼女を看取り、葬ったのはわたし自身なのにそこら辺で彼女に会えるような気がしてしまうんだ。おかしな話じゃないか」

「奥さんをまだ愛しているのね」

「いいや。悔いのない人生を送ってきたとは思わないが、彼女を幸せにしてやれなかったことがわたしの一生の心残りだ。その罪悪感からだろう」

「あら、そんなはずないわ。死んだ人間にとっていちばん怖いのは忘れられてしまうことよ。忘れられてしまえばその人は本当に死んでしまうのよ。あなたの奥さんは幸せな人だわ。いまもこうしてあなたに思い出してもらえるじゃない？」

「わたしは彼女が生きているうちに幸せにしたかったんだよ。彼女は丈夫な方ではなかったのに、ゼルテニアに落ち着くまでずっと旅ばかりで無理をさせてしまったんだ」

「たとえあなたにはそう見えても、女は好きな人と一緒なら苦労だとは思わないのよ。そのことで彼女があなたに文句を言ったりしたかしら？」

「言われなかったから余計に罪悪感を感じてしまうのさ。ふふ、まさかこんなところで彼女の話ができるとは思わなかったよ」

「あたしも、あなたに奥さんがいたとは知らなかったからおあいこかしらね。それにあなたはそんなに素敵な人を見つけられたことを誇るべきだわ。罪悪感だなんて彼女に対する侮辱もいいところよ」
「それはありがとう、デネブ」
「どういたしまして」
思わぬ優しい声音に、話しているランスロットはもとより聞き耳を立てているカノープスさえ、デネブに溺れた男たちの心情が理解できたような気がした。
だが彼女は次の瞬間には手の平を返したように男たちを突き放す。高嶺の花と言われるのも伊達ではない。そしてデネブが優しい声を出すことも滅多になかった。
「グランディーナ、君も寝台で寝ないか？　我々ももう休むことにするよ」
「私はここでいい」
「それならば毛布ぐらい使ってくれ」
「あなたもずいぶん物わかりが良くなったのだな」
「君がそう言い出したらてこでも動かないことは学んだのでね。だが物わかりがいいなどと言われるほどのことではないと思うよ。君が一晩中起きているなどと言うのでなければ、床で寝ることぐらい認めるべきだろう」

グランディーナは無言で毛布をかぶり、それで窓際の寝台が二つ空いた。ランスロットとカノープスが入り口側の寝台を占めたからだ。
カノープスが角灯の火を消すと室内は真っ暗になった。閉め切った窓の隙間から月明かりが漏れてくる。その白い筋が寝台と寝台のあいだを照らす。
規則正しい皆の寝息を聞いているうちに、彼もいつしか眠り込んでいた。

翌風竜の月七日、ランスロットとカノープスは暇つぶしもかねてカリャオの町を探索した。山中という位置が幸いしたのか、帝国軍の被害はそれほど受けていないようだ。しかし、見るべき施設などあるはずもなく、時間は大してつぶれなかったし、人目をはばかるので大っぴらに話すこともできなかった。
「なぁ、逆に帝国軍の鎧兜って目立ってねぇ？」
「そんなことはないだろう。この町はあまりドヌーブ王国だったという意識もないのじゃないか？　帝国軍を目の敵にしているようにも見えないがな」
「そうならいいんだけどな」
それで二人が宿に戻ると、グランディーナは相変わらず居眠りをし、デネブとアイーシャは額をつき合わ

せるようにして相談事だ。
「このあいだから何を熱心に話し込んでるんだ？」
カノープスがアイーシャの手元をのぞき込むと、彼女らしい几帳面で読みやすい細かい字が紙いっぱいに書き込まれていて、それは何枚もの束になっているようだ。
「デネブさんがディアスポラで皆さんに飲ませてくださった特製スープとかの作り方を教えていただいているんです」
「ああ、あれか。まぁ、確かにあれは役に立ったもんな」
「またそんな負け惜しみ言っちゃって。アイーシャったら自分から勉強したいって言い出したのよ。そんな嬉しいこと言ってくれた子、初めて。さすがのあたしも感激しちゃったわぁ」
「そんな。大げさです、デネブさん。私なんて知らないことが多すぎますから、たくさん勉強しないと。グランディーナ、何かあったの？」
「二人ともつけられたな」
「ええっ？」
彼女が素早く窓際に寄り、外をのぞく。
カノープスは反射的に入り口に立ち、ランスロットも隠れるように外をのぞいた。
二人ともそこまで油断していなかっただけに不可解な気持だがグランディーナの口調は責めるようではない。むしろ、寝ていたはずの彼女が突然そんなことを言い出した方が驚きだ。
「誰が尾行してきたんだ？」
「あの家の角に立っている男がわかるか？　少し色黒の腕の長い男だ」
「ああ、わかる。まさか、帝国の影か？」
「違う。あれは人間じゃない。アルビレオがよく使う人形、ゴーレムのようなものだ。あなたたちが気づかなかったのも無理はない」
ランスロットは己の目を疑ったがグランディーナが窓際を離れたので自分もそうした。
「どうする？　グリフォンは山の中だ。血路を開くのか？」
「町中で戦闘すれば目立つ。やり過ごす。デネブ、ユリマグアスに行くのはカリャオの外からでも大丈夫か？」
「それは、ユリマグアスと重なってみないとわからないけれど、その時はグリフォンで空から行けばいいんじゃないかしら」

「囲まれてるのか？　ゴーレムならば剣が効きにくいはずだろう？」
「ここの代金は払ったのか？」
「明日の朝の分まで払ってある」
「ならばあなたたちは裏から出ろ。私はあれを撒いて後から合流する」
「君一人で行かせるわけにはいくまい」
「あれにはデネブの魔法が効かない。カノープス一人で二人を守るのは辛いだろうし、ここから見えるのは一体だけだがほかにいても厄介だ。囲まれているかどうかはわからないが、私はここで奴の注意を引きつける。あなたたちは先に行け」
そう言いながらグランディーナは無造作に窓縁に腰かけた。すでに刀は腰に提げている。ついさっきまで居眠りしていたとは思えないような動きである。
そのあいだにアイーシャは荷物をまとめる。移動が多いことは最初からわかっていたので荷物も少なめだ。
ランスロットもそれ以上粘るのを諦めざるを得ず、最後に部屋を出た。グランディーナに言葉をかけようとしたが彼女の言うゴーレムのようなものがどれぐらいの聴力を備えているのかわからずそうしなかった。それに彼女が「言い出したらてこでも動かない」ことは昨晩、自分で認めたのだ。
「ランスロット、おまえが先頭に立て。俺はそいつを見ていねぇ」
「わかった」
幸い、宿は囲まれていなかった。四人は宿屋の台所の裏から文句を言われながら出て、裏通りを選びつつ、間もなく無事にカリャオの外に出られた。
カノープスはすぐに放したグリフォンを呼びに行き、ランスロットは周囲を警戒する。つけられていたことも気づかなかったのだから、いまもその可能性はあるだろう。
「それにしてもあの子、寝てたんじゃなかったの？」
「私もそう思ってたんですけれど、いつもあんまり熟睡してないらしいです」
「そのおかげで助かったんだけど難儀な性格ねぇ」
アイーシャも困ったような顔で頷いた。
「デネブ、君は彼女の言ってたゴーレムもどきを知ってるのか？」
「見たことはないけど、聞いたことぐらいあるわ。アルビレオって人間嫌いだもの。あんな部下ばっかり使ってるのよ。で、できはどうだったの？」

「傍目には人間そっくりだった。町ですれ違ってもゴーレムだとはわからないだろう。少し腕の長いのが不自然だが、ほかの大陸にはそういう人間もいる。遠目にしか見ていないので言えるのはこれぐらいかな」

「あんな人形ごときにあたしのカボちゃんたちが負けるものですか」

「なら、カボチャたちも連れてくればよかったじゃねぇか」

「競わせるまでもないわ。カボちゃんたちのが強いしお役立ちだし、何より、可愛いんだから！」

ランスロットとカノープスが返事に窮していると、アイーシャがいつになく弾んだ声を上げる。カボちゃんことパンプキンヘッドは、なぜかノルンとラウニィーを除く女性陣に大人気なのだ。

「カボチャさんたちってちゃんと個性がありますよね。アニーさんはおっちょこちょいだし、エパポスさんはいたずらっ子で、ワイズさんはちょっと臆病なところがあって、シーガルさんはいちばんのしっかり者なんですよね」

名前を並べられても二人には区別もつかないが、デネブはさも嬉しそうに頷いた。傍目には見分けのつかないパンプキンヘッドも、アイーシャにはちゃんと別人に見えるらしい。

「そうよ。あの子たちはできそこないの人形とは違うんですもの、あたしの自信作なんだから。でも、あなたもよく見てるわねぇ。お姉さん、嬉しいわぁ」

「はい。シーガルさんには片づけの時によく手伝ってもらうんです」

その光景は何度か見た。ということは、あれがシーガルなのだろうか。

「そうねぇ、あの子がいちばんの働き者なのよね」

「でも、ほかの三人のカボチャさんも時々手伝ってくれますよ。ワイズさんだと安心して任せられるんですけど、アニーさんが手伝ってくれる時は私も緊張しちゃうんです」

「それはあたしだってそうよ。エパポスだと目が離せないから逆に疲れちゃうわ」

「わかります、それ」

デネブとアイーシャがパンプキンヘッドについての話に花を咲かせているあいだ、話についていけないランスロットとカノープスはグリフォンの世話をしつつグランディーナの身を案じた。

「おまえ、尾行されてたのに気づいたか？」

「彼女に言われるまで気づかなかった」

「俺も同じだ。言い訳めいてるかもしれねぇが薄ぼんやりと歩いてた覚えもない」
「それはわたしもだ。だが彼女が来たようだ。詳細を聞いてみよう」
「何言ってるんだ、あれがグランディーナなものか。デネブ、アイーシャ、二人とも下がってろ！」
「じゃあ、何だ？」
「あいつの言ってたゴーレムもどきがほかにもいたってことだろう！」
近づいてくる女性は確かに髪の長さと色はグランディーナと同じぐらいだった。しかし顔つきは多少似ているものの別人でその表情は本人以上に乏しかった。何より、いまの彼女は髪を茶色に染めている。
カノープスは鎚を振りかざして速攻で殴りかかり、ランスロットも剣を抜いた。
鈍い音がしたが、その動きが止まったのは一瞬だけで、逆に拳が襲いかかる。
ゴーレムもそうだが痛みなど感じていないらしく、しかもゴーレムよりも素早い。鎚で動きが止まるのはわずかな時間で、剣はほとんど効果がない。
そしてランスロットの頬をかすめた拳はそれだけで痣を残すほどだ。
それでも彼が下がらなかったのはカノープスへの攻撃を少しでも分散させるためだった。
カノープスの鎚に何度も殴られて、とうとうゴーレムもどきもばらばらになり、動くのを止めた。
倒した後には二人ともすっかり息を切らしてしまっていた。
素材はゴーレムのように石か粘土でできているようだ。ただし髪の毛と着ていた服は人間のそれとそっくりである。
「ちくしょう。やっぱりゴーレムは魔法使いに相手させる方がいいぜ」
「いいや、君がいてくれなければお手上げだった。それに、やはり視力ではかなわないな。最初にゴーレムもどきが出た時にも君に見てもらえば良かったよ」
「一回見たからもう忘れねぇし、間違わねぇさ。それにしてもこの面どこかで見たことがあるんだが、どこでだったかなぁ？」
「そうか？　わたしは覚えがないが」
「いいや、つい最近見た顔だ」
「グランディーナ！」
アイーシャが声を上げたのでカノープスは警戒したが、今度は本人だ。

彼女は手にした包帯を左上腕にこすりつけていたが、手を挙げて応える。

それを見たカノープスは昨日の疑念を新たにした。本当に強いのならばなぜ彼女はこうも傷ついてばかりいるのだろう。シリウスの時も、ガレスの時も、エイゼンシュタインやアプローズの時も彼女が無傷でいたことはほとんどない。唯一、四天王の一人、デボネア将軍だけは軽くあしらったそうだが、まがりなりにも四天王が、いま名をあげた四人より弱いことがあるだろうか。

しかしこの話を蒸し返してまたアイーシャに泣かれるのも彼としては不本意だ。できたら彼女には聞かれないところで話をしたいのだがそうもいかないのが現状だった。

グランディーナの口調はそんなカノープスの心中には気づいていない様子だ。

「訊くまでもないと思うが、襲われたのか？」

「おまえかと思ったんだが別人でね。そっちもやられたのか？」

「存在は聞いていたが予想以上に素早かった。それにしてもずいぶん派手に壊したのだな」

「悪かったな。剣は効かねぇし、動きを止めるまでと思ったらばらばらにしちまったんだよ。ゴーレムはいつも魔法使いに任せてるつけだな」

グランディーナは包帯を投げ捨て、ゴーレムもどきに近づいた。その出血はもう止まっているようだ。

カノープスがゴーレムの頭部を拾い上げる。髪の毛の感触が妙に指にからみつくように思われるのは、本物でも使っているからなのだろうか。

「この面、どこかで見たことがねぇか？」

「おそらく、私の手配書だろう。アルビレオとは直接面識がないから、参考にできる物はそれぐらいしかないはずだ。髪の色といい私を模倣したのだと思う」

「ああ、あれか。解放軍のなかじゃあ、似てないってのが定説なんだがな」

「そんなことに手間なんてかけないわよ。万が一、あたしたちが引っかかってくれればいいってぐらいにしか思ってないわ」

「まさか、我々の動きがアルビレオにつかまれているのか？」

頬をアイーシャに診てもらいながらランスロットが訊く。

その脇でカノープスはゴーレムもどきの頭部を思い切り遠投した。

「そこまでまめに情報収集する男ではないでしょ、アルビレオって？　でも、解放軍にあなたがいることは知ってるんだし、サラディンをいずれ助けに来るのもわかってるんだから、バルモア中で網を張っていたというぐらいじゃないの？」

「アレルタと違ってカリャオは人の出入りは激しくない。新顔を見張っていたら我々が引っかかったというところだと思う」

「それは、君がサラディン殿を復活させるのを邪魔するつもりはないということか？」

「素直に光のベルを取らせはしないだろうけれど、本腰を入れて邪魔はしないだろう。デネブの言ったとおり、いまさらそんな手間をかけるぐらいなら十年前にサラディンを倒していれば済むことだ」

淡々とした口調で言って、グランディーナは手近な地面に座り込んだ。後ろから見ると髪のつけ根から元の色が現れ始めている。さすがにあと数日もすれば染め粉も取れてしまいそうだ。

その隣にアイーシャが膝をつき、腕を取った。

グランディーナは彼女を見もしない。されるがままにしているようだ。

「あらかじめ君は知っていたとはいえ、なぜ我々は気づかなかったんだ？」

「人間の気配がしない者をわざわざ警戒はしないだろう。それにあなたたちはゴーレムとも戦い慣れていないようだ」

「そんなこと、どうしてわかるんだ？」

「ゴーレムには確かに魔法の方が効果的だが、物理的に倒す時は身体の中心部にある核を潰せば動かなくなる。これだけばらせば同じことだが」

グランディーナが話しながら、短刀で抉り出した欠けた宝石を投げたので、カノープスが受け取って、ランスロットに廻した。彼はデネブに見せたが、魔女は興味なさそうに首を振ったので最後は放り投げる。

「そいつは初耳だな。だが俺の持ってる鎚ならともかく、剣で潰すのは難しいんじゃねぇのか？」

「弱点を知っていれば少しは気楽だろう。狙わなければならないところは決まっている」

「まぁな」

まだ陽は高い。夜中まではずいぶん時間があるだろう。見下ろせるカリャオの町は驚くほどちっぽけだ。

「ここで夜中まで待つのか？」

「そうした方がいいだろう。さっきの奴は倒していないし、この様子ではほかにもいそうだ」

「倒してないのか？」
「中身は土塊（つちくれ）でも見かけは人間だ。町中で戦闘すれば目立つし問題にもなる」
「その腕の傷はそいつにやられたのか？」
「そんなところだ」
カノープスは一瞬顔をしかめたが、何も言わずにグリフォンたちの方に行った。
「いやぁね、こんなところで夜まで待つなんて。ここら辺、魔獣とかいなかったかしら？　それにお昼だってまだだっていうのに。ほんとにアルビレオって他人の神経を逆なでにする名人よね」
「携帯食はまだあったろう？」
「そういう問題じゃないわよ。もう、あなたって味音痴なんだから」
「出された食事に文句を言える立場ではなかったからな。毎度毎度ありつけるだけましだ」
「そんなに大変だったの？」
「傭兵はいつでも切り捨てられる不安定な、雇い主にとっては都合のいい存在だ。食事の質など期待できまい。おかげでどんな飯でも食べられるようになった。解放軍は恵まれている」
「あら、それはひとえにマチルダさんの指導の賜物よね。あなたが言ってくれたから味が良くなったわ。こうして本隊離れちゃうと彼女のありがたみが身にしみるわぁ」
「そう言っているところ申し訳ないんだが、昼の分の携帯食だ。お湯も沸かしたからお茶も飲むといい」
「ありがとうございます、ランスロットさま」
礼を言うアイーシャに会釈して、彼はカノープスのところに向かう。
カノープスも携帯食を見ていい顔をしなかったが、文句は言わずに黙って食べ始める。
その斜め向かいに座ったランスロットは、包みを開ける前に言った。
「頼むからグランディーナに腕試しなんてふっかけてくれるなよ」
「どうしておまえにそんなこと心配されなきゃいけねぇんだ？」
「心配ではなくて警告だ」
「アイーシャがいるのにそんな馬鹿なことできるかよ。さっきだって堪えただろうが？　やるなら時間と場所を選ぶさ。ところがもう時間はないと来ている」
「それならばいい」
「そう言うってことはおまえも気にしてるのか？」

「君ほどじゃないがね」
「ほっとけ」
しばらく携帯食を嚼り、噛み、飲み込み、お茶を飲む、互いの音だけが聞かれた。
二人の背後のグリフォンたちは思い思いの場所に陣取って休んでいる。
「そう言えばデネブが心配していたんだが、ここらは魔獣は大丈夫なのかな？」
「さぁ？　グリフォンの餌になるような動物はいるみたいだが、魔獣は見てねぇぜ」
「そうか」
「まぁ、野生の魔獣なんてのは人里の近いところには出てこねぇし、出てきてもグリフォンたちが騒ぐだろうから、そんなに警戒しなくてもいいんじゃねぇの？」
「なるほど」
「アレルタにもあんな奴がいたのかな」
「そうかもしれないが、気にもかけなかった。彼女の言ったように人間でもない者の気配は気にしないし、そんな者がいるとは思ってもいないからな。だがいれば、彼女が警告してくれたんじゃないか？」
「そうかもしれねぇな」
カノープスが携帯食の包みを放り投げた。
「こんなところで俺たちだけでうだうだ言っていても始まらねぇ。グランディーナとデネブにアルビレオのことをもっと訊いてみようぜ」
「この様子だと夜中まで暇そうだからな」
「そういうこと」
二人が揃って女性陣のところに戻ると、デネブとアイーシャはおしゃべりに興じていたが、グランディーナはまたしても居眠りしているようだった。しかし二人の気配を察したのかすぐに目を開けた。
「何かあったのか？」
「そういうわけじゃねぇが、よくそうも寝てばかりいられるな。おまえ、本当はどこか悪いんじゃねぇのか？」
「そんなことはない。傭兵をしていた時に眠りが不規則なことが多かったから寝だめできるようになっただけだ」
「それにしたってよく寝てるよ。俺たちも夜中までただ待っているのも退屈だから、昨日の話の続きでもと思ったのさ」
「あれでおしまいじゃなかったの？」
「アルビレオについてもう少し知っておきたいと

思ったんだ。二人ともまだ話していないことがあるだろう？」
アルビレオの話にはデネブは気乗りしなさそうだ。
「そうねぇ。あたしがアルビレオに会ったのは一年くらい前なんだけど、まだ同じ顔をしているとは限らないわね」
「はぁ？」
いたずらっぽく笑ったデネブを横目で見つつ、グランディーナが言葉を継ぐ。
「アルビレオは一〇〇歳を越えているが転生の秘術でいつも若い肉体を保っているそうだ」
「転生の秘術？　つまり身体を取り替えてるってことか？」
「そうよ。魂を破壊されない限り、永遠に生き続けることができるのよ」
「そんなに都合良く若い肉体が手に入るのか？　だいたい、そいつにだって魂はあるんだろう？　それはどうするんだ？」
「アルビレオは元の肉体の魂を殺す。相手の都合など考えてはいないだろう」
「ずいぶん悪趣味な技を使いやがるんだな」
「自分は特別だと思ってるのよ。生きる価値のない若造が若くてきれいな肉体を浪費するぐらいなら自分が使った方がよほど有用だって言ってはばからないんだから。そのくせ一つの肉体なんてせいぜい二、三年しか使わないわ。わかるでしょ、自己陶酔（なるしすと）家だって意味が？」
聞いていた三人は思わず頷いた。
「サラディンがラシュディに弟子入りした時にはアルビレオはもう何度も転生をしていたそうだ。サラディンは自分の身体を捨ててまで長生きしたいとは思わなかったそうだ」
「それがふつうだろう？」
「アルビレオにそう言ったら、デネブが聞いたのと似たようなことを言われたそうだ。醜い者も愚かな者も認められない。存在する価値さえないと。その考えが醜いとは思わないのかと言ったが、結局、同意されなかったらしい」
アイーシャは一昨日のデネブの台詞を思い出して顔を上げたが、彼女は気づいていないようだ。
「ちょっと待ってくれ。アルビレオが一〇〇歳以上ということはラシュディは幾つになるんだ？　彼に転生の秘術が使えるということはラシュディも転生の秘術を使ってあれだけ長生きしているのか？」

「何言ってるのよ、ランスロット。あなたたちのところの王様だってそれで神帝なんて呼ばれてたんじゃない。グランも転生の秘術を使ったから長生きしたってわけ？」

「そういやあそうだな。でも、グラン王が長生きだったことについては別の噂が立ってたぞ」

「あら、どんな？」

「王が人魚の肉を食べたんで不老不死になったって話だ。何しろお二人の皇子が生まれたのもあの歳になってからだからな。五英雄だから長生きなんだって言う奴もいたが、ロシュフォル皇子、僧侶ラビアン、魔獣王ダルカスはとっくにいないからっていうのが理由だ。その説によれば、もちろんラシュディも人魚の肉を食べたってことになる」

「カノープス、それは根も葉もない、たちの悪い噂話だろう。君がわざわざ持ち出すようなことではないと思うがね」

「俺はグラン王のことをおまえより知ってるからそう思うのさ。あれは九〇歳を越えていた老人じゃない、まさに神帝だ。ギルバルドは王の死に立ち会ったそうだがとても瀕死の重傷人とは思えないような力で首をつかまれてラシュディの裏切りを罵られたそうだ。さすがの王も死は覚悟したらしく、自分の墓前にラシュディとエンドラの首を捧げろと言って死んだ、その時つかまれた首筋にはしばらく痣まで残っていたっていうんだからな」

「だが、わたしも各地を廻ったが人魚の肉を食べると不老不死になるというのは嘘だ」

「当たり前だ。だからグラン王が長生きだったのは人魚の肉を食べたからだという噂は昔ながらの迷信なのさ。それにグラン王の時代にカストラート海の人魚たちと仲が悪くなったせいもあるしな。だが本当の理由は誰にもわからない。だから王はいまでも神帝と呼ばれるんだ」

ランスロットはグラン王と話したことがない。彼が覚えているのは玉座に鎮座ます王の姿だけだ。従騎士になったばかりの少年に、王と話す機会など巡ってこなかった。憧れだった騎士団長アッシュ以上に、雲の上のような存在であった。

「羨ましいな、陛下のことをそんなに覚えているなんて」

「人間的にはいろいろ問題もあったがな。だが間違いなく英雄の器だ。さすがにラシュディに会ったことはないがね」

カノープスは昔を懐かしむような顔はせず、グランディーナを振り返った。
「そういやあ、サラディンは師匠についてはおまえに忠告しなかったのか？」
「サラディンはラシュディのことは何も言っていない。気をつけろと言われたのはもっぱらアルビレオの方だ」
「ほかにアルビレオについて何て言われたんだ？」
「アルビレオはゴーレムの扱いに長けているし、独自のゴーレムも作っている。一〇〇年かけてため込んだ知識は伊達ではないと」
「まぁ、カペラよりは強いんだろうな？」
「カペラの魔力の源はサタンだ。アルビレオとは比べ物になるまい」
そのサタンを召還したのはグランディーナの身体を借りた賢者ポルトラノだ。ポルトラノにとうていかなわないことはウォーレンも認めている。カノープスにもようやくランスロットの心配していた「もっと強力な魔法使い」という事情がわかり始めていた。
「私もデネブが知っている顔といまのアルビレオの顔は違っていると思う。ただ、彼は周囲にほかの人間を置きたがらないし、たとえいたとしても見分けるのは難しくない」
「そのなかでいちばんの美少年か美青年を捜せばいいんだろう？　それにしても二、三年ごとにそう都合良く美少年だの美青年だの見つかるものか？」
ランスロットは肩をすくめ、グランディーナも「さあ」と気のない返事だ。
「アルビレオの気に入る顔があればいいのよ。彼の美醜の基準があなたと同じとは限らないでしょ？」
「ああ、なるほど。替える方が優先になるわけだな。待てよ、じゃあ、ここで俺たちがアルビレオを倒したとしても、奴は身体を替えるだけで済むのか？」
「冴えてるじゃない、カノープス。おそらくはそのとおりね。でも、転生の秘術は万能じゃないわ。アルビレオはいまの身体を強制的に失って、どうせ用意している別の身体に転生するだろうけど、自分の意志で転生する時よりも多少の障害は考えられるんじゃないかしら？」
「それはあんまり慰めになってねぇぞ」
「それでも彼の力を失えば、帝国には多少なりとも影響を与えられるかもしれない。ラシュディという後ろ盾を失えば所詮はそれだけの男だ。ここでアルビレオを倒すことはたとえ復活しても無駄にはならない」

「おまえ、その場合、ラシュディも転生するって可能性を忘れてねぇか？」
「あら、魔法のことになんて興味なかった人が急に冴えちゃったわね。どうしたっていうの？」
デネブに揶揄されたが、カノープスの指摘にはランスロットもアイーシャも思わず顔を見合わせた。
しかしグランディーナは淡々と話を続ける。
「ラシュディ一人で国が造れるわけじゃない。いまの帝国はラシュディあってのものだが、それもエンドラという為政者やヒカシューという軍の統率者がいてのことだ。我々はいずれエンドラやヒカシューと戦うことになる。二人が倒されればいくらラシュディがいても帝国は存在できない。ガレスにはエンドラほどの人望はない。帝国がなければラシュディやアルビレオが転生してきても遅い。もちろん警戒する必要はあるだろうが、ゼテギネア帝国ほどの脅威にはなるまい」
「そいつもサラディンの受け売りか？」
「人についてはそうだろう。私はエンドラもヒカシューも知らないし、アルビレオにも面識はない。だが帝国については自分で考えたことも多い」
「アプローズ男爵なんて小物を倒すのがやっとの俺たちには女帝も大将軍も雲の上のような存在だぜ。敵だなんて言われてもラシュディとガレス皇子以外はあんまり実感が湧かねぇってのが俺の本音だな」
「それはわたしも似たようなものだ」
とランスロット。何も言わないがアイーシャにも母の仇であるガレス皇子以外には実感はないだろう。
「ゼテギネア帝国を倒すことが私の仕事だ。あなたたちと同じ次元でものを見ていたのではリーダーは務まらない。それにヴォルザーク島を発つ時に私は言ったはずだ。エンドラとラシュディに勝つまでヴォルザーク島には帰らないと」
「それはわたしだって忘れてはいない。だが女帝エンドラを敵と思えるかと言われると実感がないし、ヒカシュー大将軍も似たようなものだ」
「大将軍の娘も加わったことだしな」
「確かに、ラウニィー殿の存在は大きいな。彼女だって実の父親とは戦いたくないんじゃないか？」
しかし二人の感想にグランディーナは淡々と続ける。
「いまはそれでかまわない。あなたたちに実感が湧こうが湧くまいがこのままいけばいずれエンドラやヒカシュー、ラシュディと見(まみ)える。そのうちに彼女らが敵だという実感も湧いてくるだろう」
その静けさに逆に恐ろしさを感じてランスロットは

思わず疑問を口にした。それはとっさの思いつきでしかなかったが、彼女の言い分に初めて不安を覚えたためでもあった。

「グランディーナ、ひとつ訊くが、君のなかに女帝やヒカシュー大将軍と和解するという可能性はないのか？　確かに女帝は帝国の為政者だし大将軍も軍の最高責任者だ。二人ともその責任は重いだろうが、我々は、彼女らに戦う以外の選択肢を与えてはいけないのか？　解放軍にはそれだけの正義があるのだと君は主張するのか？」

「おい、ランスロット、冗談にしたって言っていいことと悪いことがあるぞ」

「君だって女帝や大将軍には敵という実感が湧かないと言ったばかりじゃないか」

「だからってエンドラやヒカシュー大将軍とそう簡単に和解できるのか？　帝国がゼノビア王国を蹂躙したのも事実だ。それなのにおまえはその責任者と仲良くできるのか？　そんなこと、トリスタン皇子やアッシュに言ってみろ、アッシュなんて卒倒しちまうぞ」

「ぐっ」

トリスタン皇子とアッシュの名を出されるとランスロットには反論できない。いまは解放軍のリーダーに仕える騎士であっても、トリスタン皇子のもと、ゼノビア王国が復興すれば、騎士として仕えるのが彼の夢であり、いちばんの願いだ。一時の情に駆られて二人の不興を買うのは望むところではなかった。

しかし彼の言ったことは、グラン王時代のゼノビアを知るカノープスには愉快な話ではなかったらしい。

そこにグランディーナが変わらぬ調子で口を挟む。

「案ずるな。二人に限らず降伏勧告はするつもりだ。特にその二人の影響力は計り知れない。降伏に応じてくれれば無用な戦は避けられる。戦で死ぬのはいつも下っ端の兵士からだからな」

「おまえ、本気で言ってるのか？」

「応じる応じないは彼女らの自由だ。だが勘違いするな。解放軍の名において保護するつもりはない」

「確か、ディアスポラでもエイゼンシュタインの件で似たようなことを言っていたな。まさか、敵将全部にそんなことを考えているなんて思わなかったぜ」

「全員じゃない。ラシュディとガレスは別だ」

「それはなぜだ？」

「ずっとそう決めていた。あの二人だけは許さないと。私のこの手で殺すのだと。だが、エンドラもヒカシューもいまさら降伏など受け入れまい」

ランスロットもカノープスも言うべき言葉が見つからない。なぜ、というありきたりの言葉さえ、二人は口にできなかった。

そんな様子に気づいたのか、グランディーナはかすかに微笑んだ。しかし彼女は、あくまでも沈黙を貫いたのだった。

「男のおしゃべりってし出すと長いわねぇ。アイーシャ、悪いんだけど、みんなにお茶入れてきてちょうだい。それでお茶にこれを混ぜてほしいのよ」

「何ですか、これは？」

「一時的に魔法の目になれる薬よ。これを飲んでおけばみんなにもユリマグアスを見られるわ」

「はい」

「変な副作用なんてないんだろうな？」

「半日くらいふだんは見えないものが見えるってぐらいね。人畜無害な薬だわ」

「ポグロムの森で悪霊が見えたが、ほかにもそういうものがいるということか？」

「あなたたちの目に見えるものだけが存在しているわけじゃないもの。世界は広いのよ」

下手なことを言うとまたデネブにへそを曲げられると思ってカノープスは神妙そうな表情で頷いた。むしろ、彼女が話の流れを変えてくれたことは感謝していると言ってもいい。

「そう言えば、全然話は違うけど、器って何だ？」

「あら、結局、その話になっちゃうのね。これは人間に限ったことなんだけれど、たいていの人は多かれ少なかれ魔法を使う素質があるし、逆に剣を使うこともできるの。もちろん魔法使いだった人が騎士になるにはすごく時間がかかるし、魔法使いになろうという騎士も並大抵の努力じゃ済まないでしょうけどね。器があるってそういうこと」

「じゃあ、その器がないとどうなるんだ？」

「魔法が使えないってだけ。でも滅多にあることじゃないわ」

「魔法が使えないからといって別に不便なわけじゃない」

「デネブさん、どうぞ」

「あら、ありがと」

よほど込み入った話かと思っていたのにデネブの話がすぐに終わってしまったので、ランスロットもカノープスも拍子抜けする思いだ。そんなことをグランディーナにわざわざ言ったというサラディンの意図も不明である。それにいくら器があるからと言われたっ

て、ランスロットはいまから魔法使いになろうとは思わないし、魔法使いたちも騎士になりたいとは言い出さないはずだ。グランディーナの言うとおり、器などなくても大した不自由はしないだろう。

当のグランディーナもそんなことには関心のなさそうな顔でお茶を飲んでいる。

「それでは理(ことわり)とは何だ？」

「器だの理だの、魔法のことも知らない人たちがずいぶん小難しい理屈を持ち出したわねぇ。

グランディーナ、あなた、誰とどんな話をしたの？」

「アナトリアの魔女ババロアと、アカシアとミミルの泉について話した。それ以上はよく覚えていない」

「ああ、なるほど。あのおばあちゃんとね」

デネブは頷いたが、お茶をすすっただけで話を進めようとしなかった。

「一人で納得してるなよ。おまえ、ババロアとも知り合いなのか？」

ランスロットとカノープスにもアイーシャがお茶を入れてくる。デネブが入れさせた薬は、お茶の味には影響がないようだ。

そしてアイーシャはデネブの話を不思議そうな顔で聞いているだけである。

「そりゃあ、魔法使いのなかじゃ魔女の三姉妹は有名人だもの。それと、話してあげないわけじゃないけれど、あなたたちにはちょっと難しいわよ。それにあたしはあんまり教え上手じゃないし。サラディンに聞いたらどう？」

「じゃあ、そっちはお預けだな」

「それではユリマグアスに話を戻すが、そこに入ったとして光のベルはどうやって探す？」

「探し物にはこんな言葉があるの。その物のことは同じ物に訊け。だから、ベルのことはベルに訊くのがいちばんよ」

「ベルなんて持ってねぇぞ」

「もう、石頭さんはこれだから困るのよ」

デネブは手にしていた鍼力(ぶりき)のコップをカノープスのそれに軽く打ちつけた。鍼力同士の鳴る音は軽快とは言いかねるが、彼女の言いたいことはわかった。

「あまりベルらしくないがそういうことか。金属ならばいくらでもあるし、探すのには手間取らなさそうだな」

「そうでしょ？」

しかし、例によって真っ先にお茶を飲み干したグランディーナが、立ち上がりながら口を挟む。

「デネブ、その探し方は同じ材質の物じゃないと意味がないんじゃないか？」
「あら、そうだった？」
「私もその探し方は読んだことがあるが、材質に注意するよう書いてあったと思う」
「それじゃあ、光のベルってのは何でできてるんだ？　鍼力と武器だって材質は違うだろう？」
デネブが沈黙し、カノープスはここぞとばかりに彼女を睨む。
「思い出しておくわ。どうせ、夜中までにはまだ時間があるでしょ？　光のベルって何でできてるんだったかしらねぇ？」
カノープスは肩をすくめたが、文句を言うのは差し控えた。
だが、陽はそろそろ山の背に差しかかりかけたころで、宿屋で過ごした昨日の晩よりも涼しさが身に迫ってくる。
「アイーシャ、火を消してくれ。夜になると焚き火は目立つ。お茶はおしまいだ」
「わかったわ」
「いよいよもって手持ち無沙汰だな」
「今日は満月だから晴れれば明るくなる」
「そう願いたいね」
やがて陽と交替するように月が昇り、その冴え冴えとした灯りは待つだけの彼らの気持ちをいくらかでも慰めた。
月が高くなるにつれてデネブはカリャオの方を何度も見、とうとう立ち上がる。
それに合わせてランスロットとカノープスはグリフォンを連れてきて、まず荷物をくくりつけ、皆が騎乗した。
「見て！　出てきたわ！」
それは注意して見なければわからぬものだった。まるで影のような町が蜃気楼よろしくカリャオに重なっている。
月の灯りがなければ見落としてしまうかもしれない。あるいは灯りなどない方がはっきり見えるのだろうか。それともデネブが飲ませたお茶が見せる幻なのか。
デネブを先頭に彼らはカリャオに近づいた。
「よそ見しないであたしに続くのよ！」
魔女を乗せたメムピスに残る四頭が続く。言われなくてもグリフォンたちはよそ見をせず、一行はこうして境界を乗り越えた。

ユリマグアスの側から見ると、カリャオの方が影のようだ。彼女らに気づくことなく、町の人びとがすれ違ってゆく。

「どうなってんだ、これ？」

「あたしたちはいま時間と空間の狭間にいるの。まだ町の中に入ったわけじゃないんだから、うろついているとそこら辺から落っこちるわよ。狭間に落っこちたらあたしだって助けてあげられないから」

そんなことを言われると、足下までおぼつかないような気持ちになる。

「どうしてカリャオの人たちには気づかれていないんだ？　こんなにはっきり重なってるのに？」

「みんなが見えるものだったらカリャオもユリマグアスももっと有名になるだろうけど、魔導に造詣が深くないと見えるものじゃないの。さっき飲んだお茶のおかげであなたたちには見えるわけ。ただし、それだけじゃユリマグアスには来られないんだけど」

「あれがその門番、スコルハティか？」

ポリュボスから降りながらグランディーナが言う。

その視線の先に巨大な狼がいる。それは闖入者を察したのか立ち上がったところで、こちらを見て短くうなり声を発した。

見える限り高い塀に囲まれたユリマグアスの町は、スコルハティの守る門のほかに入り口はなさそうだ。しかもその塀が高く、中の様子もうかがえない。

「まさかと思うけど、グリフォンであの塀を飛び越えられたりしないよな？」

「だったら、あの門番の意味がないじゃない。気になるなら、あなたが試してみなさいよ」

「別にグリフォンじゃなくて俺が飛んでいってもいいんだけど、いきなり打ち落とされるのも愉快じゃないからな」

ランスロットとアイーシャは軽口をたたくような気分ではない。

そんななか、グランディーナだけがいつもと変わらぬ口調だ。

「カノープス、手綱を預かっていてくれ。私が近づいてみる」

しかし、ふと触れあった手は驚くほど冷たかった。カノープスは彼女の腕をつかんだが、乱暴に振りほどかれる。

「勘違いするな。私が恐れているのはスコルハティじゃない、私自身だ」

「グランディーナ！」
彼女は足を止めて振り返った。その顔が笑おうとしてできずに歪み、また感情を押し隠してしまう。
たったそれだけのことなのに、辺りの空気が冷え冷えと感じられる。
アイーシャが震えてデネブにしがみついた。魔女もさっきまでの軽口はどこへやら、厳しい表情でグランディーナを見ている。
ランスロットもカノープスも、つい最近、似たような感覚を味わったことに気づいた。
それはアプローズ男爵と戦った時だ。そしてもう一人、初めてガレス皇子に対峙した時も同じような悪寒を覚えた。
しかしそれは、いったい何の前兆だというのか。
グランディーナは彼らに背を向けて、いつもと変わらぬ足取りで門番に近づいていった。
なぜかグリフォンたちもおとなしい。
煌々とした月灯りも、今夜はどこか冷たい。
スコルハティは近づいてくるグランディーナを注視しているようだ。
両者のあいだは確実に縮まっている。
その時、小山のような姿が一声吼えて彼女に襲いかかり、火花が散った。
狼は右手に飛び退り、グランディーナも曲刀を構えている。
獣が振り向くより速く彼女は斬りかかった。
両者が交錯し、また離れる。
山が動く。
グランディーナが応戦する。
火花が飛び、激しく打ち合う音がする。
彼女が頭を振ると雫が飛んで、月の灯りに光った。
その隙にスコルハティが襲いかかるも、グランディーナは時に避け、かわし、受け流し、返す刀で逆に斬りかかった。
それらの動きがランスロットやカノープスには追いきれない。
グランディーナとスコルハティが止まる時、減速する時にかろうじて前の動きが推測できるだけだ。だが彼らにできるのはただそれだけなのだ。
二人とも己が目を疑った。と同時にデネブの言葉が実感される。
二人がかりでもかなわない？　それだってだいぶ控えめな言い方だと言っていいだろう。
しかしそのデネブも固唾を呑んで見つめている。

だいたいスコルハティの大きさが桁外れだ。魔獣のなかでは最重量級のドラゴンさえこの怪物の前では子犬にしか見えなかろう。

その巨大な狼と対等に剣を合わせることがどれほどの技量を要求されるのか、グランディーナの腕も桁外れと言っていい。

突然大きな音を立てて金属片が飛び、彼女は地面に打ち倒された。

その手から転がった曲刀は柄に近いところから刃がなくなっている。

狼の四肢が彼女の腕と足を押さえつけていた。

「グランディーナ！」

アイーシャの悲鳴がひどく遠くから聞こえたが、誰も近づいてくる気配はない。

「離せ！」

息が弾んだ。

心臓が激しく打つあまり、いまにも口から飛び出しそうだ。

激しく撥ねる身体は往生際も悪く、逃れようともがいている。

内から募る破壊衝動はこんな形での決着など望んではいない。

殺せ。

壊せ。

たとえ得物がなくても、この手が、足が、身体が動く限り、破壊し尽くせ。

目の前の怪物も、その後ろに佇む町も、何もかもこの手に。

その欲望に抗うことの何という苦痛か。

その欲望は何と甘美なことか。

剣を使っていれば、いつかこういう事態に陥ることは承知していた。

その落とし穴はいつも彼女の足下に口を開けて待ちかまえていた。

そこにはまってしまった者たちを彼女は知っている。

彼らの末路を彼女は覚えている。

自分もいつかそうなるのだという恐れと。

自分だけはそうなるまいとする決意と。

剣を振るうたびに恐ろしかった。

見抜かれてはならない。

知られてはならない。

自分の力を隠さなければならない。

その恐れも。

その迷いも。

その葛藤も、全てこの力に委ねれば終わること。
しかし身体が動かせない。
スコルハティの束縛から逃れることができない。
彼も相当な力で押さえ込んでいるらしく、腕も足も皮がずるむけ、肉が抉られる。
その痛みが乖離しかけた彼女の意識を取り戻させた。
「私の負けか？　得物で負けるとは思わなかった」
「人間の身でありながら我と対等に戦えるとはぬしは何者だ？　それにこの力、もう少し我と戦っていればぬしは堕ちたろう。かといって暗黒道に傾倒しているわけでもない。オウガとも異なる。しかもぬしからは人間にあるべき魔力が感じられぬ。ぬしは人間ではないのか？」
「私も知らないからあなたの質問には何一つ答えようがない。だがもしも答えられたらユリマグアスに入れてくれたのか？」
「ユリマグアスに何の用だ？　ますます興味深い話だ。我も長いことユリマグアスの門番をさせられているが、あれほど殺気をまき散らしてきた者も初めてならば、ぬしのような者も初めて見る」
「私は光のベルという神聖呪具を探している。長居するつもりはない」
「光のベルを何に使うつもりだ？」
「サラディン＝カームの石化を解く」
「何だと?!」
スコルハティは鼻をひくつかせて周囲のにおいを嗅ぐ。大きな鼻が迫ってきた時にはさすがの彼女もいい気はしなかった。
「なるほど。あそこにいるのがぬしの連れというわけか。なるほどなるほど。あの魔女を動かすとは、やはりぬしはただの人間ではあるまい。おもしろい、それならばぬしたちを通してやろう。立つがいい」
グランディーナは立ち上がる。
弾んだ息は平常に戻り、破壊衝動も失せていた。
「だがこの門をただでくぐらせるわけにはいかない。フィラーハは融通が利かないのでな、ぬしは我に負けたのだから門をくぐる贖いを差し出してもらわねばなるまい。さて、ぬしは我に何を差し出せると言うのだ？」
「それは、私自身だけだ。私の命、私の身体、それ以外には何もない」
スコルハティの顔がまた迫る。神をも殺せるという獣、だがその名がオウガバトルにおいて神なり悪魔なりの側について戦ったという記録はまったくない。

「命を取るのはつまらぬ。それではぬしを通してやる意味がない。ぬしの身体に興味もない。我が人間の雄であれば話はまた別だろうが」
言いながら、狼は彼女の周囲を二度三度と巡ったが、不意に立ち止まって、刃のない刀の柄を興味深そうに眺めた。
それを見たグランディーナは、〈何でも屋〉のジャックのことを思い出す。彼にもらった刀を折ってしまった。彼に何と言って謝ったものだろう。
「これは無銘の刀よな。ずいぶん使い込んだようだが、ふふ、この刀が健在であれば、首を狙われたは我の方だが、先に力尽きたは刀の方か。おもしろい。こんな刀で我とあれだけ戦えるのか。門をくぐる贖いにぬしの命に等しいものをしばし頂いていくぞ！」
「それはいったい何だ?!」
スコルハティの姿が跳び上がり、消え失せた。
と同時に右腕の感触が失せ、平衡感覚を崩して彼女は膝をついた。
「グランディーナ！」
真っ先に走ってきたアイーシャが抱きついて、弾かれたように離れる。
「グランディーナ？」
「どうしたんだ、アイーシャ？」
「え？　いいえ」
口ごもる彼女をランスロットもカノープスも不思議そうな顔で見た。
「大丈夫だ。もうじき収まる」
グランディーナはそう言ってかすかに笑ってみせる。
「いったい何があったんだ？　おまえの動きは追えねぇし、剣は折れちまうし、狼はどこへ行った？　何だ、その腕は？」
カノープスが指摘したとおり、グランディーナの両方の籠手の下から血が滴っている。
少し離れていたアイーシャもそれに気づいたらしく急いで近づいてきた。
「ユリマグアスに行く前に傷の手当てをさせて。どなたか、松明をつけてください。グランディーナ、座ってて」
彼女は言われたとおりにする。ランスロットが松明をつけ、カノープスが籠手を外すと、両手首の甲側が皮も肉も抉られて、骨さえのぞいていた。
「ひでぇな、これは」
「手当てしてもらうついでだ。カノープス、私の靴を脱がしてくれないか」

「足もやられたのか？」
足首も似たような状態だったので彼は顔をしかめるどころではなかった。靴の中も血まみれで、肉片さえ転がり落ちてきた。
「この靴、もう使い物にならねぇぞ。どうする？」
「私は裸足でも大丈夫だ。捨ててしまっていい」
「了解っと」
しかし靴を投げようとしてカノープスは、カリャオにいる者からこちらを見られていることに気がついた。その視線の先をたどると、ランスロットの持ってる松明に行き着く。
「どうした？」
「いや、俺たち、目立ってるみたいだからよ」
不思議そうな顔をしていたグランディーナも、彼がカリャオと松明とを指すと納得したようだ。
「鬼火なんて、案外、種を明かせばこういうものなのかもしれないな」
「ガキのころに怖がってたものがだんだん胡散臭く思えるのは気のせいか？」
「反対はしないけれど、あなたが鬼火を怖がっていたとは知らなかった」
「たとえばの話だ。誰も怖いなんて言ってねぇ」
言ってからカノープスは笑い出す。グランディーナも声はあげなかったが、スコルハティと戦う前とは別人のような笑顔を浮かべた。
働いているアイーシャ一人が沈んだ顔だ。
「ごめんなさい、グランディーナ。包帯も薬草も足りないわ」
それでアイーシャをのぞく三人の視線がデネブに向けられたが、彼女は手を振った。
「あたしが持ってるわけないでしょ」
「すみません。私が気がつかなくて」
「こんな怪我、誰だって予想外だろう。おまえさんが責任を感じることはないさ」
「でも、私にできることなんてそれだけなのに」
「それならばわたしのマントを使うといい。カリャオに戻れば、包帯も薬草も買えるさ」
「すみません、ランスロットさま」
「あなたのマントを借りるのは三回目だな」
「必要ならば、何回でも使うといい」
ランスロットはマントを脱いだついでに剣で細く裂き、そのあいだはカノープスが松明を持つ。
「さっきから右腕を使ってないようだが、どうかしたのか？」

「急に動かせなくなった。あなたたちにはスコルハティとの会話は聞こえなかったのか？」
「話？　俺の目にはおまえたちはしばらく睨み合っていたようにしか見えなかったぞ。話なんてしていたのか？」
「私の刀が折られてからずっとだ。私がサラディンの名を出したらユリマグアスに入れると言い出した。だがその贖いに私の命に等しいものをもらうと言って消えたんだ」
「まったく動かないのか？」
「触られているのもわからない。肩に余計な棒切れをくっつけて下げているような感じだ。これでは動くのに邪魔だな」
「腕を吊っておいたらどうかしら？」
そう言ってアイーシャが、マントを切って三角にし、腕を吊った。
「ぶら下げたままでいるよりは良さそうだ」
「カリャオに戻ったら足の包帯を巻き直すから、それまで無理しないでね」
「わかってる」
グランディーナは自分の右腕を押さえながら立ち上がる。吊っていてもやはり動かせない腕は邪魔になっているようだ。
「この籠手と靴って、ここに置いたままでもいいのか？」
「別に害はないんじゃないの？」
「行こう。光のベルを手に入れなければ」
「一人で歩けるのか？」
「大丈夫だ」
先に立ったグランディーナの右上腕にアイーシャが無言でしがみつく。
カノープスの持っていた松明をデネブが預かり、彼とランスロットはグリフォンの手綱を引いた。
門番のいなくなった門は分厚い扉だったにも拘わらず音も立てずに開き、全員が通るとまた閉まった。
彼女らはそうしてユリマグアスに入っていった。

夜中のためか町の中は閑散としていて人影もない。真っ直ぐな道路は碁盤の目のようでそのあいだに無数の尖塔が立ち並ぶ。
見渡す限り、尖塔以外の建物は見かけない。やはりふつうの町ではないようだ。
「この様子だと光のベルはどこだって、誰かに訊いて解決しそうにねぇな」

「朝まで待った方が良くないか？」
「訊ける奴がいるのならな」
「この時間では何とも言えないな。でも、明るい方が探しやすいだろう？」
「ふつうに探せるなら訊ける奴もいそうなものだ」
「あら、ベルを鳴らしてみましょうか？」
「そんなこと言うってことは、光のベルが何でできているのかわかったのか？」
「手元にないからちょっと誤魔化してるけど、これで見つかってくれないかしらね？」
そう言ってデネブは手にした硝子のコップと水晶玉を無造作に打ち鳴らした。そもそも、そんな物をどこから取り出したのかも不明だ。
鳴り響いたのは高く澄んだ透明な音だった。
雪が降った後の晴れた日、まだ何も起きていない早朝に聞こえたような、そんな幽けき音だ。
月明かりに照らされた町にその音が響き渡っていく。反射することもなく、吸収されてしまうこともなく、音は水がどんな隙間をも満たすように、町中の隅々まで満たしたかのようだった。
そして音を呑み込んだユリマグアスの町は、しばしの沈黙の後で不意に音を返した。
四方八方から無数の鐘とベルの音が返ってきたのだ。
その音に驚いた一行はグランディーナ以外は思わず耳を覆ったが、やがて無数の音が止んで最後まで残っていた音は、デネブが最初に鳴らした音よりもずっと細くて頼りない、小さな小さな音であった。
「どこから鳴ってるんだ？」
「しっ！」
足音にさえ気を遣ってグランディーナが動き出す。四人もその後からついて、一緒に音の発信源を探した。
「言っておくけど、この探し方だと一回しか効果はないわよ。音が消えちゃったらそれでおしまいですからね」
「何でそういうことを先に言わねぇんだよ？」
「緊張感があっていいじゃない？」
「こんなわけのわからねぇところで緊張感なんか求めるかよ」
ユリマグアスの町はカリャオと同じくらいの広さがあったが、グランディーナはやがて町のほぼ中央にある尖塔の前に立ち止まった。
「ここだ」
しかし高さ何十バスもありそうなその塔には入り口もないし窓も扉も見当たらない。耳を澄ませば確かに

あの細い音が鳴り続けており、それはその塔の中から聞こえてくるようなのだが、肝心の入り口がどこにもない。

「アイーシャ、手を離してくれ」

「え、ええ」

グランディーナは塔に近づいた。その表面に手を伸ばすと、身体が溶け込むように入っていった。

塔は石のようで石ではない物体でできている。だが身体の細胞が一つひとつ得体の知れない物体と混ざり合うような感覚は気持ちのいいものではなかった。

グランディーナはその中にベルを見つけた。白い台座の上でかすかな音が歌うように響いている。

塔の壁は自らが光を発していた。一辺は十バスほどの広さで、台座とベルしかない。

その光景に彼女は生まれて初めてと言っていいほど敬虔な気持ちに駆られて、思わず片膝をついた。

彼女が光のベルを手に取ると、ようやく音が止んだ。

「サラディン、もうじきあなたに会える」

幾度も祈りに近い気持ちで、心の中だけで繰り返してきた名前だ。

白髪混じりの黒髪、灰色を帯びた青い眼差し、指先が薬品灼けした少し長い手、静かに語りかける低い声、十年を経たサラディンの姿は、彼女のなかでこんなにも鮮やかであった。

熱いものがグランディーナの頬を濡らす。滴り落ちたそれは吸い込まれることなく、塔の床に小さな水たまりを作り出した。

「サラディン、あなたに聞いてもらいたいことがあるんだ」

わずかな望みを未来につないで廃墟と化したバルモアを離れた。

「サラディン、あなたに話したいことがあるんだ」

南へ、南へ、アヴァロン島に渡る、最も近いルテキアの港を目指して歩き続け、食いつなぐためにはどんなことでもした。

「サラディン、あなたは私だとわかってくれるだろうか？」

アヴァロン島に渡り、大神官フォーリスの庇護を受けながら知恵と力を探し求めた。

「サラディン、あなたは私のしてきたことを許してくれるだろうか？」

さらなる知恵と力を求めてゼテギネアを離れ、世界中の戦場を転戦した。

「サラディン、ずっとあなたに会いたかった」

ウォーレン＝ムーンと出逢い、ゼテギネアに戻り、帝国を倒すべく解放軍の将となり、その道はいまだ半ばである。

「サラディン」

感触さえない右腕を彼女はかき抱く。

「サラディン、サラディン！」

十年間、口にすることさえはばかられたかの人の名が、ようやく現実のものとなろうとしていた。

グランディーナが塔に溶け込んでから、残された四人は後に続くことができないでいた。じきにかすかな音も消えてしまい、塔の中からは何も聞こえてこない。

彼らのほかには誰もいないであろうユリマグアスの街角で、ただ待つだけの時間は、思いのほか長かった。

やがて入っていった時と同じようにグランディーナが現れた時には、東の空の色が変わり始めてさえいた。

「グランディーナ！」

アイーシャが飛びついたので彼女は後方によろめいたが、今度は塔に溶け込むことはない。尖塔に寄りかかっただけだ。

「グランディーナ、どうしたんだ？　塔の中で何があった？」

「遅くなってすまない。光のベルを手に入れるだけなのに、待たせてしまった」

「謝ることはねぇさ。おまえが塔の中で何をしていたかぐらい想像はついてる」

「そうか」

彼女はほんの少しだけ笑って、手にしていたベルをかざした。

「これが光のベルだ。デネブ、これをサラディンの前で鳴らせばいいのだな？」

「そうね。こんなところで鳴らしてもサラディンには聞こえないでしょ？」

「わかった」

彼女は心得顔に頷くと、アイーシャにベルを差し出した。

「光のベルはあなたが持っていてくれないか」

「私が？」

「私は自分のことで手一杯だ。ランスロットやカノープスも戦闘に巻き込まれれば光のベルどころではなくなるだろう。あなたに預けておくのがいちばん安全だと思う」

アイーシャは目の下をこすり、手巾（はんかち）を取り出す。手の平の上に広げたそれに小さなベルが載せられたので、

彼女は大事に包み込んだ。
「わかったわ。あなたの代わりに大事に持ってる。でもサラディンさまを復活させる時はグランディーナに返すわね」
自分では努めて明るく言ったつもりだったが、言葉が切れるとアイーシャの表情は沈んだ。彼女は再びこみ上げた涙を隠すように、グランディーナの右腕にしがみついた。
「デネブ、君はこのことを予想していて我々を連れてきたのか？」
「まさか。あたしだってこんな事態は予想外だわ。ねぇ、時間も遅いわよ。どこかで休まない？」
「ユリマグアスを離れてからの方がいいだろう。休んでいるあいだに移動されたのでは意味がない」
「そうだな。どうもこういうところは好かねぇ。グリフォンたちも門のところに置き去りにしてきちまったしな」
「そうね。カリャオの次にどこへ行くのか、わからないもの」
「知らねぇのか？」
「そんなこと、興味ないもの」
それで一行がユリマグアスの入り口に戻ると、グリフォンたちはエレボスを中心にして待っている。
「今度もあたしに着いてくるのよ。着いてこられなかったらあなたたち、ユリマグアスに置き去りですからね」
ランスロットが気遣うまでもなくグランディーナは片腕だけで器用にポリュボスに騎乗した。だが彼女も言ったとおり、光のベルをアイーシャに預けて正解だったようだ。
来た時と同じように彼女らはメムピスを先頭にユリマグアスを離れ、再びカリャオの郊外に戻った。
じきに山間の町も夜が明けるだろうが、デネブは野宿の支度をするとすぐに寝てしまった。
一方、アイーシャはグランディーナの腕を診たが、動くどころか感覚さえ戻せないままだ。
「たぶん原因はスコルハティにある。彼はしばしと言った。動かせるとしたら彼の意志によるのだろう」
「やっぱり私にできることは何もないのね」
「命を取られたかもしれないことを思えば、このまま動かせなくてもかまわないくらいだ」
「そんなこと言わないで。サラディンさまだってあなたが自分を犠牲にしたことを知られたら、きっと悲しまれるわ」

「私は犠牲だなんて思っていないから、あなたが泣くことはない。自分の身体のことはよくわかっている。あなたももう休むといい」
「駄目よ。カリャオで薬草とか買ってこなくちゃ」
「必要な物を書いておいてくれれば誰でも行けるし、あなたは疲れているようだ。休んだ方がいい」
「グランディーナだって怪我をしているわ」
「これぐらい私は大丈夫だ」
グランディーナは笑ってみせたが、その顔色はいつもより血の気が引いていて白い。だがいまよりもっと重傷だった時にも、彼女は決して弱音は吐かなかった。
アイーシャは適当な紙に必要と思われる薬草の名前などを書いた。その時に気づいたのは、自分がすごく疲れていて、眠りたくてしょうがないということだ。
「私も休むわ。必要な物はここに書いたから、もしも買ってきてくれたら、私を起こしてね」
「わかった」
「おやすみなさい」
アイーシャを見送ってからグランディーナは立ち上がる。もちろんランスロットとカノープスも、この機会は逃さない。
三人は微妙な距離を置いてそこから離れた。

「おい、さっきのあれは、どういうことだ？」
「あれとは何のことだ？」
「とぼけるな。あの狼と戦った時だ。あれだけの力を持っているくせに、どうしてふだんは手を抜いてやがる？　シリウス、ガレス、エイゼンシュタイン、アプローズ、こいつらがあの門番より強いはずがあるまい？　おまえの腕ならこのなかの誰一人として自分は傷つかずに倒せたはずじゃないのか？」
「それは駄目だ」
「なぜだ？」
「ずっとそうしてきた。そのために傷ついても全力は出せない」
「それもサラディンに言われたからか？」
「違う。自分で決めたことだ。力を抑える。そう決めた。いつ決めたのかは忘れた」
「わからねぇな。そんなことをしておまえにどんな得があるっていうんだ？」
「得などない。力を抑えるのは自分のためじゃない。周りのためだ」
「どういうことだ？」
「あなたたちも気づいただろう？　私は、ガレスやアプローズと同類だ。力を出しすぎればいつでも奴ら

のようになる。スコルハティにも言われた、もう少し彼と戦っていれば堕ちただろうと」

「堕ちる？」

「スコルハティを倒し、ユリマグアスを破壊し、あなたたちを殺す。彼が押さえていてくれなければ私はそうした。そうするまいとする理性よりも、そうしたいと欲する気持ちの方がずっと強かった。あれを何と呼ぶのかはわからない。だけど私は、そういう人間だ。もっとも、私も自覚したのはついさっきのことだ。以前から力を抑えてはいたが、実際にどうなるのかはっきりとは知らなかった。ウォーレンから解放軍のリーダーを引き受けた時は気づいていなかった」

「じゃあ、何だ。おまえは解放軍のリーダーを止めるとでも言うつもりか？　自分は人間離れした奴だから俺たちに警戒しろとでも言うのか？」

「いまさらリーダーを降りる気はない。たとえサラディンを取り戻せなくても帝国との戦いを止めるつもりもない。私が始めた戦いだ。どんなことがあってもエンドラとラシュディを倒すまでは終わらせない。でも二つめの質問の答えはおおむねそんなところだ。この腕では私もしばらくは人並みだが」

その言葉も終わらぬうちにカノープスは彼女の襟首をつかみ上げていた。

「てめぇの腕がどれだけのものか知らねぇが、俺をなめるなよ、ガキが」

グランディーナは目を丸くする。

「言葉は悪いがわたしもカノープスに賛成だ。君をリーダーと仰ぎ、ここまでともに戦ってきた。半端な気持ちでそこから降りる気はない。それにわたしは騎士だ。君が何者でも一度捧げた剣を引っ込めるつもりはないね」

「馬鹿な！　これから先、スコルハティ並みの相手が出てくれば私はいつでもあなたたちを襲うかもしれないんだぞ？　あなたたちだけじゃない、トリスタン、アッシュ、ユーリア、ギルバルド、私が彼らを襲うかもしれなくても、あなたたちは同じことが言えるのか？　彼らだけじゃない、解放軍の全員を危険にさらすかもしれないんだぞ？」

「だがおまえはそうしなかった」

「さっきはスコルハティが押さえていてくれたからだ。いつも都合良くいくものか」

「だがおまえにはそうしないだけの理性が残ってるはずだ」

「そんなもの当てにできると思ってるのか？」

「その時は俺が身体を張ってでも止めてやる。言っただろう、味方を信じろと、俺を信じると」
「カノープス一人で止められなければわたしがいる。君は何より自分を信じるべきだ」
「あなたたちにはわからない。あれはあなたたちを殺したところで止められるようなものじゃない。目の前の全てを倒さなければ、壊さなければ、止まるものじゃない。私がなぜこんな傷を負ったと思う？　それだけスコルハティに抗ったからだ、それだけの力で押さえられたからだ。自分のことなどいちばん信じられるものか」
「じゃあ、俺たちを信じろ。おまえを信じている俺たちを信じろ。それもできないと言うのか？」
グランディーナはカノープスを、次いでランスロットを見た。
「私は、あなたたちを殺したくないんだ」
「わたしだって死にたくはないさ。だけど、戦場に出る限り、その覚悟はしている。いや、武器を取った時にと言うべきだろう。わたしは殺されることより殺すことを選んだ。いまでも戦う時には恐れがあるし、震えが止まらないことがある。それでもわたしは戦うことを止めようとは思わないだろう」
カノープスはやっと彼女から手を離した。
「あなたたちは馬鹿だ」
彼女がうつむくとほつれた髪がその顔を覆い隠す。
「おまえほどじゃねぇし、おまえには言われたくねぇな」
「何度でも言うさ。あなたたちは大馬鹿だ」
「ここまで来ておいて何をいまさら、という気もするがね」
「まったくだ。ゼテギネア帝国に喧嘩売ってる奴ほどの大馬鹿はそうそういねぇだろうさ」
最初に笑い出したのはランスロットだった。次いでカノープス、とうとう最後にはグランディーナまで声を上げて笑った。けれど彼女の目には光るものがあったことを二人とも気づいていたが、最後まで何も言わなかった。
「確認しておきたいんだが、おまえは左手で武器は使えるのか？」
「使えるが右腕が邪魔だ。平衡感覚も狂ってるし、いつものようなわけにはいかない」
「じゃあ、得物もないし、しばらくおまえは戦力外と考えていいな」

「すまない。あなたたちには迷惑をかける」
その額をカノープスはこづいた。
「馬鹿言え。デネブもあんなことを言っていたが、せっかく俺たちが来てるんだ。あんなものを見せられた後じゃ役不足かもしれねぇが、おまえの剣ぐらいになってやるよ」
「そうだな。君はあまり深刻に考えない方がいい。解放軍に戻れば帝国との戦いはこれからだ。君がそんな顔をしていたら皆の士気に影響する」
「わかっている」
「最悪の場合はって言おうと思ってたことは先に言われちまったし」
「君も意地悪いんだな」
「勘違いするな。俺だって何もサラディンが復活しないことを望んでるわけじゃないさ。おまえの言ってたラシュディに匹敵するほどの強力な魔法使いが必要という意味もわかってきたし、デネブの言ってたこともようやく実感できた。グランディーナの知識から考えても俺たちにはもっと広範な知識を持ってるような奴がいたらいいなと思ってもいる」
「わかってる」
「そういやあ、今日はどこに行くのか、デネブに確認しなかったな」
「一昨日話していたバルモア南の教会跡だろう。私がサラディンと別れたのがそこだ」
「サラディンと一緒にいたのは三年間だと言っていたな？」
「そうだ。ずっとそこにいた。教会跡と言っても廃墟というわけじゃない。私には快適な住居だった」
「サラディンがいたからだろう？」
「それもあるけど、その前がもっと酷かったから、どんな住処でもましだったんだ」
「七歳以前の記憶は封印されてるんじゃなかったのか？」
「それでもレクサールという名前のように突然、記憶か幻が降って湧くことがある。たいていはろくなことじゃなくて、夢に見て、泣き出して、何度も彼を困らせたけれど」
「いまのおまえからは想像もつかねぇな」
「私も子どもだったんだ」
グランディーナは照れくさそうに微笑んだ。
「サラディンてのはそれほどの奴か？」
「私がここにある全てだ。何者にも代えられない。この十年間、彼のことは思わない日は一日もない」

「サラディン殿に早く再会できるといいな」
彼女は頷いた。幸せそうな顔は、ついほころんでしまうものと見える。
「彼に話したいことがたくさんあるのに、何から言えばいいのかわからない」
「君の素直な気持ちを打ち明ければいいさ。サラディン殿はきっとわかってくれるだろう」
「ありがとう」
話しているうちに夜は明けきっていた。
「あなたたちも少し休んだらどうだ」
「一晩くらい徹夜したって堪えやしねぇよ」
「それならば、アイーシャから預かった書きつけだ。店が開きそうな時間になったら買い物に行ってくれないか」
「ずいぶんあるけど、金は足りるのか？」
グランディーナは硬貨の半片を書きつけに載せる。
「万が一の時はそれで〈何でも屋〉のジャックを呼び出せ。金ぐらい貸してくれるだろう」
「承知した」
結局、〈何でも屋〉のジャックは呼び出さないで済んだが、デネブとアイーシャが起きてきたのは買い物が済んだ後だった。
アイーシャはグランディーナの足の傷に包帯を巻き直し、それが済んでから、残り少ない携帯食で朝食を取った。
やがて五頭のグリフォンが、カリャオの郊外を発っていった。

カリャオからひたすら北上して一行が小島にいちばん近いチンチャアルタの郊外に着いた時には西に傾いた陽も沈もうとしているところであった。
「今日はチンチャアルタで一泊するのか？」
「いや、このまま夜を待って島へ渡る。そこにサラディンがいなければ、休んでバルモアへ行く。アルビレオが行方を知っているだろう」
「島に帝国軍はいそうか？」
カノープスは目をこらし、海に浮かぶ小島を見る。ぽつんと立つロシュフォル教会の尖塔は、彼にポグロムの森の中に建っていた、棄てられた教会を思い出させた。
「ここから見た限りじゃ動いている奴はいないな。あの島の大きさはどれくらいだ？」
「周囲四バームくらいだと思う。十年前には教会以外の建物もない無人島だった」

「人間だろうとゴーレムもどきだろうと、あまり大軍を置ける広さじゃねぇな。それにほかの町から見れば、そこに軍隊を置くのは何かあるって宣伝してるようなものだ。サラディンがいてもいなくても生きてる兵士はいなさそうだな」

「その島からはチンチャアルタとバルモアとどちらが近いのかな？」

「チンチャアルタだ。泳げば二倍近く違う」

カノープスは一瞬息を呑んで、今度はチンチャアルタの方に目をこらした。こちらも大軍はいないようだが、ゴーレムもどきはさすがに見分けられる距離ではない。しかし、バルモアにこれだけ近づいたいま、その存在は通常の軍隊以上に警戒すべきだ。

そんなことをしているうちに、沈んだ陽を追いかけるように月が昇り、暗闇があっという間に辺りを支配する。

「行くぞ」

グランディーナがポリュボスに騎乗し、皆も次々にグリフォンにまたがった。彼女の表情を見ているとても利き腕が動かないとは思えないが、右の方に傾きやすい不自然な動きがいつもと違う。しかし懐具合の寂しさから曲刀に代わる武器は買っていない。

目指す小島は灯りもなく、その先に位置するはずのバルモアの町も、上空から見てもほとんどが闇の中だ。

じきに彼女らは島の海岸に着陸していた。

ランスロットとカノープスが先に降り、様子を探ることになった。

夜の中に黒々と佇む教会は半壊しているのが見える。

物音ひとつしない静けさ、しかし先に立ったカノープスは一度戦ったゴーレムもどきの気配をじきに察していた。

「松明、まだあったろう？　暗いところでは俺たちの方が不利だ。点けてくれ」

だがその言葉も終わらぬうちに暗闇の中から風を切る音が聞こえてきて、彼は応戦しなければならなくなった。

「アイーシャ、光のベルをよこせ！」

「は、はいっ」

「あなたたちはグリフォンに乗っていろ。私はサラディンを探しに行く。いなければすぐ逃げ出せるようにしておけ。岸の警戒を怠るな！」

「わかったわ」

アイーシャからグランディーナに手渡された光のベルが頼りない音を立てる。けれど、その音色は夜の静寂にそのまま吸い込まれたりせず、グランディーナの手の中で密やかに鳴り続けた。

教会の中で灯りがついたのは彼女が建物に飛び込んでからだ。

「きゃあっ！」

エレボスが急に翼を広げて鳴き声を上げる。

月灯りと音だけでも海の中から何かが次々に現れるのはわかる。

「ゴーレムだからって海に潜ませておくなんて、もう、アルビレオって最低よ！」

真っ先に襲いかかったエレボスに乗り手のないポリュボスとピテュスが同調し、血の臭いを嗅ぎつけたシューメーとメムピスも興奮して抑えきれない。

デネブもアイーシャもグリフォンから降りざるを得ず、かといってその場を離れるのも不安が残った。

グリフォンがゴーレムもどきに次々に襲いかかる。

しかし剣同様、その人間の皮膚などは紙よりもたやすく切り裂いてしまう鋭いくちばしと爪も、岩のように頑強な身体にはほとんど効果がないようであった。

一方、教会跡で不意打ちを受けたランスロットとカノープスも苦戦していた。

数の多さによるのと弱点を知っていてもやはり剣はほとんど通用しない。

カノープス一人では自ずと限界がある。

一体を倒してもまた一体、そのあいだにもう一体と襲いかかるゴーレムもどきに二人の息は上がり、攻撃を誤ったり、傷を受ける回数が徐々に増え始めた。

アイーシャの悲鳴とエレボスの鳴き声が聞こえたのはその時だ。

「ここはわたしが守る。君は彼女らを助けに行ってくれ！」

「馬鹿野郎！　おまえ一人でどうこうできる相手か。むこうにはグリフォンがいるんだ、いざとなったらあいつらは空に逃げられる」

だがこちらが八方ふさがりなことも事実だし、興奮したグリフォンをデネブやアイーシャが押さえていられるとも思えない。

そうランスロットが思った刹那、

「二人とも下がれ！」

グランディーナの叫び声とともに無数の雷がゴーレムもどきの上に降り注いだ。

その爆音は解放軍の魔術師の比ではなく、あれほど苦戦させられた相手が根こそぎ倒されるさまは痛快を通り越して怖気さえ感じる。

カノープスがとどめを刺したのも数体いたが、ほとんどはいまの雷撃で倒されたものだ。

自ら築いた瓦礫の山をグランディーナに肩を貸されて乗り越えてきたのは、サラディンその人であった。

「わたしを表へ連れていってくれ」

グランディーナとサラディンに続いて外に出ると、五頭のグリフォンにゴーレムもどきが群がり、余ったのが上陸してきているところだった。

「デネブ、アイーシャ！」

二人に襲いかかろうとしたゴーレムもどきを、雷の矢が正確に撃ち倒す。

「サラディンなの？」

デネブに遅れて振り返ったアイーシャの顔が驚きと喜びに輝いた。

その二人を追い抜いて、カノープスはさらに追随するゴーレムに殴りかかる。

「カノープス！　エレボスたちをゴーレムもどきから離せ！　魔法の巻き添えになったらグリフォンもやられるぞ！」

「わかってらぁ！

エレボス!!」

獰猛なグリフォンも歯の立たない相手となれば話は別だ。カノープスがそのまま戦場に飛び込んでエレボスだけでも引き離すとほかのグリフォンたちもこぞってついてきて離脱したが、すでに羽根をやられていたポリュボスが遅れ、悲痛な鳴き声を上げて海に落ちた。

「ポリュボス！」

「ランスロット、サラディンを頼む！」

「グランディーナ?!」

気づくと腰の剣が抜き取られていた。

それよりも驚いたのはサラディンの頼りなさだ。端から見ていた時はわからなかったが、震え、息も荒い。さすがの彼にも石化から復活後に使う魔法は相当、身体に負担となっているのだろう。

ランスロットに支えられても、強靭な精神力だけで意識を保っているように見える。

そうと気づいてアイーシャが近づいてきたが、サラディンは厳しい表情で彼女の手を払った。

「あの馬鹿！　エレボス、シューメー、戻れ！」

カノープスは二頭のグリフォンを駆ってポリュボスをつかみ上げさせた。

そこにゴーレムもどきがさらに追いすがったので上と下から引っ張られてポリュボスは悲鳴を上げる。
「エレボス、行け！」
しかし、グランディーナが下からポリュボスとのあいだに割り込み、グリフォンを降りたカノープスが上からゴーレムをぶん殴って、ようやく三頭は戦線を離脱した。
そしてカノープスも、すかさずグランディーナを羽交い締めにして逃げ出す。
その目先すれすれに雷の束が落ち、一度で倒しきれないのを見てとると、サラディンはさらに、いままでいちばん凄まじい爆音を轟かせて雷の雨を降らして、とうとう力なく膝をついた。
「サラディン殿、大丈夫ですか？」
「わたしのことはよい。あちらを頼む」
「はい！」
走り出すランスロットの後をアイーシャも追いかける。肩で息をするサラディンに近づいたのは、意味深な顔で微笑んだデネブ一人であった。
「お疲れ様、サラディン。相変わらず冴えた腕してるわね」
「ここでそなたに会えるとは思ってもいなかった。どういう風の吹き回しだ？」
「あら、野暮なことは言いっこなしよ。でも、あれぐらいで息を切らせるなんてあなたもちょっと鈍(なま)ってるんじゃないかしら？」
サラディンは答えず、グランディーナたちの方に視線をやる。
左の羽根がもげて、右前足の爪が全部剥がれたポリュボスはほかにも大小数え切れない怪我を負わされており、もはや手の施しようもなかった。グリフォンの羽毛と毛皮でわかりにくいが、ゴーレムもどきにのしかかられた時に、内臓が破裂してしまったのかもしれない。カリャオでも医薬品は補充したが、アイーシャもこれだけの怪我は想定していない。
それでも何とか治療しようとする彼女の手を止めたグランディーナは断末魔に苦しむグリフォンの首を一刀両断に斬り落としたが、自身もかなり傷ついていた。
「あんなものに斬りかかったから刃こぼれしてしまったな。ランスロット、すまない」
「なぜあんな無茶をしたんだ？　わたしに行けと言えば済んだはずだぞ」
「とっさに自分の腕が動かないことを忘れていた」
グランディーナは苦笑いを浮かべて、ランスロット

の手に押しつけるように剣を返す。
しかし、力任せにゴーレムもどきをたたいたのであろうそれは、刃こぼれどころかなまくらだ。こんな剣でよくポリュボスの首を落とせたと思うほどである。
「馬鹿野郎！　忘れたで済む話か。もっと冷静になれ。おまえのせいでほかの奴に怪我させたいのか？」
「そうじゃない」
「奴らにつかまった時点でポリュボスはもう駄目だったんだ。おまえが突っ込んだところで助けられたわけじゃねぇ」
「わかってる」
「ならば被害を増やすな。おまえにその判断ができないとは言わせねぇ。サラディンだって――――おい！　俺の話はまだ終わってねぇぞ！」
「サラディン！」
真っ先にグランディーナの治療を始めていたアイーシャが突き飛ばされ、ランスロットが急いで支える。
しかも彼女はポリュボスに手を尽くそうとして報われなかったのが原因なのか、疲労の色を濃くにじませていた。
グランディーナは転げるようにサラディンのもとに走ってゆく。
しかし、そうして己の前に跪いた彼女に彼は厳しい口調で言い渡した。
「わたしを気遣うより、おまえにはすべきことがあるのではないか？　もっと冷静になれとも言われたばかりだろう。なぜ傷ついた仲間を、おまえの身を案じる友を思いやってやれないのだ？」
「ごめんなさい」
彼女がそんなに気落ちしたところはアイーシャさえ見たことがなく、自分が傷ついたことも忘れて、彼女は思わず涙ぐんだ。
その肩をカノープスが軽くたたく。
「おまえが謝らなければならない相手はわたしではないだろう」
「はい」
さらに肩を落としたグランディーナにデネブが後ろから抱きついた。
「十年ぶりにあなたに会えて、地に足もつかないほど浮かれてる子に意地悪言うものじゃないわ。ほんとにあなたって、融通の利かないくそ真面目さんよね」
「いいんだ、デネブ。悪いのは私だ。サラディンが怒るのは当然なんだ」
笑おうとして彼女の唇が歪む。

とうとうランスロットは、柄にもなくグランディーナの頭を軽く数度たたいた。目の前の彼女はまるで十歳の少女のようだ。彼女のなかでだけ、時が十年前に戻ってしまったようにも見える。

「すまない、ランスロット」

「そう思うのならば、まず君が手当を受けてくれ、グランディーナ。カノープスもわたしもサラディン殿のおかげで軽傷だ」

「わかった」

言われるまでもなくアイーシャが近づき、デネブはサラディンの隣に腰を下ろす。

ランスロットの背後に立ったカノープスが、その背を少し強くこづいた。

「おまえ、いい加減、こいつに甘いのにもほどがあるぞ」

「子どもの十年は長い。君こそ、少しぐらい大目に見てやってくれてもいいだろう？」

「どうせすぐに羽目を外すんだから、きつめに言っておいた方がいいんだよ。ガキには特にな」

「それなら憎まれ役は君に任せる。締められてばかりじゃ彼女が気の毒だし、きつい物言いはわたしの性に合わないと思うのでね」

気の利いた返答を思いつかないでいると、デネブの手から飛ばされたとんがり帽子がカノープスの頭に斜めに乗っかった。

「あなたの負け。もっと男を磨いて、彼女の一人でもつくりなさいな」

「余計なお世話だ！」

本気で腹が立ってとんがり帽子を投げ返したはずなのに、それはうまいことデネブの頭に収まった。

「お上手」

今度は上げかけた手をアイーシャが押さえたので、彼は自分も怪我したことを思い出す。もっともそれは、無謀にも敵中に飛び込んだグランディーナと違い、教会内で待ち伏せを喰らった時に負わされたものだ。

「薬草とか、足りるのか？」

「大丈夫です」

カノープスの次はランスロット、それから四頭のグリフォン、とアイーシャは忙しく立ち働き、最後にサラディンの前に膝をついた。

「サラディンさま、私たちを助けていただいた時にご無理をなさったのではありませんか？」

「こうして休んだのでだいぶ楽になった。そなたこそ休むといい。働きづめで疲れたのではないか？」

「お気遣いくださってありがとうございます。私は大丈夫です」
「それよりもグランディーナ、おまえはいつ、仲間たちをわたしに紹介してくれるのだ？」
「あ、ああ、サラディン」
隅で縮こまってすねた様子のグランディーナの顔が、それだけのことで喜びに輝く。
戦闘が終わったせいか、サラディンの表情もいまは穏やかだ。
彼女は立ち上がり、ランスロット、カノープス、アイーシャの順に指したので、三人はそれぞれ挨拶した。
「彼は旧ゼノビア王国騎士団のランスロット＝ハミルトン、彼が同じゼノビアの魔獣軍団のカノープス＝ウォルフ、彼女はフォーリスさまの一人娘、アイーシャ＝クヌーデルだ。デネブも含めて皆、解放軍の一員だ」
ランスロットとカノープスの名にサラディンは頷いたきりだったが、フォーリスの名が出ると少なからぬ驚きを示した。
「そなたがフォーリス殿の娘御か。母上によく似ているが、フォーリス殿は健やかにお過ごしか？」
しかし、アイーシャは答えられずに両手で顔を覆ってしまった。すかさずグランディーナが彼女を抱き寄せると、時々嗚咽が漏れる。
「フォーリスさまはガレスに殺された。アイーシャがアヴァロン島に戻った前日のことだったそうだ。私たちも間に合わなかった」
「そうか。フォーリス殿がついに」
サラディンは頷くと目をつぶり、しばらく黙祷した。その口調からは、大神官の死を予期していたように思わせる。
同じ魔法使いだが受ける印象はウォーレンとまったく違う。若いころからゼノビア王国に仕えたウォーレンは、占星術師という特別な地位だったが世俗的なところがある。しかしラシュディの二番弟子で何処の国にも仕えたことのないサラディンには、浮世離れした隠遁者風情が漂う。
「そろそろ夜が明ける。ポリュボスを弔ってから少し休んでバルモアへ行こう。それでいいか、サラディン？」
「リーダーはおまえだ。わたしの同意を求める必要などない。いまはおまえの判断に従おう」
そう言ってから彼は立ち上がり、グランディーナを抱擁した。

その動きに彼女は逆に戸惑ったような表情を見せ、おそるおそる背に廻された手は、彼に拒絶されることを恐れているようだ。

「サラディン？」

「大きくなったな、グランディーナ。十年前とは見違えるようだ。よく、わたしを助けに来てくれた」

「うん、サラディン！」

子どものように泣き出した彼女の髪を、サラディンは優しく梳いた。十年前にもそうしてなだめたのだろうと思わせる仕草だ。

けれど、十年前の少女は彼と同じだけの背と、彼より肩幅のある大人の身体を持った女性になっていた。

いったんバルモアを離れ、こうしてバルモアへ戻ってくるまでの十年間にどんなことがあったのか、グランディーナはろくに語らない。

だがサラディンという人物には、彼女のすべてを受け入れるだけの器量があるように見えた。彼女が彼に寄せる全面的な信頼が、そのことを何よりも証明していた。

それから、ポリュボスを葬り、島で一休みした一行は、陽のあるうちに四頭のグリフォンに分乗して一路バルモアを目指した。

上空から見てもそれとわかる廃墟のただ中に、旧ドヌーブ王国の中心であったバルモア城が残る。瓦礫の中に佇む城には、ところどころ破損の痕も見えるが、周囲の破壊とは比べ物にもならない様子だ。

しかし、さすがに瓦礫の中に住む者はほとんどいないようで人影は見かけない。

サラディンとともにエレボスに乗ったグランディーナは、小島からずっとしゃべりどおしだ。この十年間のことか解放軍のことか、あるいはまったく別のことか、話す種は尽きないものと見え、さすがに身振り手振りは混じらなかったが、それだけに言葉があふれ出すようだった。

サラディンはそのほとんどを頷いて聞いているだけのように見えるが、時々口を挟み、彼女に考えさせるところなど、会話を歓迎しているらしいし、笑顔さえ浮かべたところなどグランディーナに負けず劣らず楽しんでいるようでもあった。

「あの子があんな顔したのは初めてね。妬けちゃわない？」

アイーシャとメムピスに乗ったデネブがいたずらっぽい顔で訊いたが、アイーシャは即座に首を振る。

「そんなことないです。グランディーナはサラディンさまのことがいちばん大事で、でもいまの自分には力が無いから助けられないって自分の手を傷つけてしまったことがあるから、きっといま、すごく嬉しいんだと思います」

「それにしても少しはしゃぎすぎだわ」

だが、眼下にバルモアの廃墟が広がるようになると、グランディーナは言葉少なになり、サラディンもまた厳しい表情でバルモア城を見るようになった。

やがて彼女は最上階のバルコニーにエレボスを乗り込ませ、残る三頭も続いた。

「カノープス、先に行け。ランスロットはサラディンを庇って、デネブ、アイーシャ、続いてくれ。グリフォンだけ残す」

矢継ぎ早の指示に呼応するように侵入したカノープスにゴーレムもどきが襲いかかる。

しかし、三度目ともなるとこつもつかめて数度の殴打で倒してしまえた。

彼らが入っていったのは玉座の間で、玉座には若い男が一人座っている。

その前に整列していた衛兵たちにサラディンが問答無用で稲妻の雨を降らせた。

「これ以上の茶番は終わりにしていただこう、アルビレオ殿」

「相変わらず無粋な男だな、サラディン。十年ぶりに石からの復活がかない、しかも養い子の手にかかってというのを、俺も祝福してやろうというのに」

立ち上がり、瓦礫の山と化した衛兵たちのあいだを歩いてくる男は美しい顔立ちをしていたが、どこか作り物のような印象を与える。

「あいにくとわたしはそのような気分ではない」

「では何をしに来たと言うのだ？　俺もおまえの愚痴など聞いてやる気分ではないよ」

「あなたをバルモアから追い出すためだ。あれからまた転生されたのか。十年経っても他人の命を尊ばぬ傲慢さは変わられぬようだ」

「ははは っ。おまえの生意気さも変わっていない。そんな口の利き方をするから師の怒りを買うのだ。石にされれば少しは利口になるかと思っていたが、ますます石頭になったようじゃないか。いい加減に暗黒の力を認めよ、サラディン。おまえほどの魔力があれば、暗黒道を極めることができよう」

「極めてなんとする？　魔道の果てに何がある？」

「究極の力だ。俺たちは神を越えるぞ」

「そんなことのために民を犠牲にするのか？　世界を破滅に導くのか？　あなた方は破壊し尽くされた世界で新たな神になろうというのか？」
「そうだ。民も世界も新しく作ればよい。究極の力の前には些末事にすぎん。俺には永遠の命がある。誰も俺を止めることはできん」
アルビレオは笑い声を上げたが、デネブの一言でそれは途切れ、顔色まで変わった。
「あなたって相変わらず人の心もわからない、自分勝手なお馬鹿さんなのね」
「デネブ?!　どうしておまえがここにいる？　そうか、帝国を裏切って反乱軍に加勢したんだな。おまえのやりそうなことだ」
「あら、そんなこと、あなたなんかに答える義理はないでしょ？」
そう言うと、彼女は悪魔的な笑みを浮かべたので、この時ばかりはランスロットもカノープスも、デネブが味方であることに感謝した。
「ふふん、その様子じゃ、あたしのことでラシュディからたっぷり絞られたんじゃないの？　いい気味だわ。あたしのカボちゃんたちを馬鹿にした罰よ、あなたの人形なんて、命令されなきゃ動けない木偶の坊じゃないの」
「おまえのパンプキンヘッドなど何の役にも立たないじゃないか。それにラシュディさまはおまえのことなど気にかけてもいない。どれだけの魔力があるのか知らないが自惚れるな。第一、俺はサラディンと話している。おまえが割り込んでくるな」
「そんなこと言っていいのかしら？　あなた、あたしと話すのが怖いんじゃないの？　だいたい、あたしの研究が役に立たないなんて言うんだったらあなたが帝国にどんな貢献をしたのか聞かせてもらいたいわね。あなたの自慢のお人形さんが帝国軍のどこに配備されているの？　ラシュディに尻尾振って永遠の命とやらを手に入れた以外に、あなたが帝国のためにしたことって何だったかしら？　あたしの研究はあたしだけのものよ、帝国のためになんか働く義理はないわ。あたしがゼテギネア帝国にいたのはラシュディが頭を下げたからよ。ましてや、師匠の腰巾着するしか能のないあなたなんかに、役に立たないなんて言われる覚えはないわね」
「うるさい、だまれ！　ごちゃごちゃと屁理屈ばかり並べ立ててうるさい女だ。おまえたちなどまとめて消えてしまえ！」

「いかん、デネブ、下がれ！」
サラディンが彼女の腕をつかんだが、アルビレオから放たれたアシッドクラウドは玉座の間全体に広がったので誰も逃げようがなかった。
アシッドクラウドは敵中に酸の雲を作り出す強力な魔法だ。雲自体は一瞬で霧散してしまうが、鎧を着ているグランディーナとランスロットはともかく、上半身は肌をさらけ出したカノープスや僧衣だけのアイーシャ、長衣のサラディンやデネブには大きな打撃であった。
「この野郎、ふざけるな！」
カノープスはその怪我をものともせず、速攻でアルビレオに殴りかかった。
だが、そのあいだに瓦礫の山が形をなして立ち上がる。それは本来のゴーレムの姿にそっくりだったが、材料が大量にあったせいかやたらに大きい。
「カノープス、加勢するぞ！」
「三人とも、大丈夫か?!」
グランディーナは真っ先に倒れたアイーシャを抱き上げる。しかし彼女は気絶しておらず、デネブは自慢の服に穴が空いていたが本人は無事、ランスロットに庇われたサラディンも軽傷で済んだようだ。

「もう！　女の子の服を溶かすなんて、アルビレオって最低！」
サラディンが雷の塊を巨大なゴーレムに撃ち込んだ。集まった岩が崩れ落ちる。
岩はまた集まろうと動いているが、緩慢な動きは受けた打撃の大きさを示すようだ。
そのあいだを縫ってカノープスがアルビレオに追いつき、ランスロットがその逃げ場を塞ぐ。
「こんなところで俺を倒してもすぐに復活してみせるぞ！」
「その時はおまえをまた倒せばいいさ！」
「愚かなことを。おまえたちもサラディンと同じだ。蛆虫のように這いつくばっていくがいい！　俺たちが高みへ昇るのを指をくわえて眺めていろ！」
つい力が入りすぎた。アルビレオの頭はたたき潰され、カノープスは返り血やら脳漿やらを浴びて壮絶な格好になってしまったし、反対側にいたランスロットも無事では済まなかった。
「それを愚かと言う者には言わせておくがいい」
彼が振り返ると、グランディーナに支えられたサラディンが立っていた。アイーシャもデネブにすがりつくように立つ。

「人間は一足飛びに先へ進むことはできない。わたしたちは己の足で歩いてゆく生き物だ。高みに昇ることだけが人の望むことではない。それも理解できずに高みに昇ることになど何の意味もありはしない」

「同感だな」

カノープスが右手を挙げると、サラディン、ランスロット、それにデネブの順に手を打ち合わせた。

兄弟子と対峙してから厳しい表情を浮かべていたサラディンの顔に、ようやくわずかな笑みが浮かんだ。

その日のうちにカニャーテに向かった一行は、バルカスとの再会を果たし、サラディンと再会した天才彫刻家は涙さえ流して喜んだ。

バルカスの弟子からバルモア中に伝えられたアルビレオ打倒とサラディン復活の報であったが、サラディンとともに帝国と戦った面子は皆、殺されており、ゼノビアやホーライのようにドヌーブでも人材の少なさが案じられた。

しかし、サラディンの復活を喜ぶバルモアの人びとの中には、彼がバルモアに残らず解放軍に参戦すると聞いてともに参加することを望む者が十人ほどおり、グランディーナたちもマラノまでグリフォンで飛んで帰る、というわけにはいかなくなったのだった。

バルモアからマラノまではカストロ峡谷経由で五日かかる。解放軍の本隊はトリエステにて待機しているはずである。

「マラノに帰ったら、次はいよいよアラムートの城塞か。ここは帝国もすんなりとは通しちゃくれねぇだろうな」

グランディーナは頷いたが、サラディンが口を挟む。

「グリフォンを二頭とランスロットとカノープスを貸してくれ。アラムートに行く前に寄っておきたいところがある」

「どうして俺たちなんだ？」

「わたし一人では不安が残る。そなたたちの腕前も見せてもらった。不穏なところだ、つき合ってくれ」

「それならば私たちも一緒に行けばいい」

しかしサラディンは首を振り、変わらぬ口調でつけ加えた。グランディーナの言ったとおり、一見穏やかそうだが、なかなかどうして、頑固そうだ。

「将たる者がこれ以上軍を離れていてはなるまい。おまえたちは先に戻り、予定どおりにアラムートの城塞を落とせ。あそこはだてに荒鷲の城塞などとは呼ば

れていないぞ」
グランディーナが露骨に落胆した表情を見せる。
「もしも私の腕が動かせたら、連れていってくれたか？」
「おまえは皆のもとに戻れ。ランスロットにはお前の代わりに来てもらう」
「どこに行くんだ？」
「カストラート海に向かう。おまえたちはアラムートで待っているがいい」
グランディーナは嘆息して、ようやく頷いた。
「わかった。気をつけて、サラディン。
ランスロットとカノープスも気をつけろ。それと、サラディンを頼む」
「任せておけよ」
「君の代わりがどれだけ務まるのかわからないが、君たちこそ無理をするな」
「グランディーナのことなら心配しなくていいわ。あたしとアイーシャで無茶しないよう見張っておいてあげる。あなたたちこそ気をつけなさい。カストラート海ではいま、面倒なことになっているわよ」
「そうであろうな」
バルモアからカストラート海まではグリフォンに乗っても七日もかかる。
サラディンとカノープスがエレボス、ランスロットがシューメーに乗り、その姿はやがて東の空に見えなくなった。
彼らを見送っていたグランディーナが皆に出発の号令をかけたのは、それからのことである。

こうして、賢者ラシュディの二番弟子、妖術師サラディンを迎えた解放軍の戦いは新たな局面を迎えることになった。
オウガバトルを初めとする伝説が、彼女らの前に事実として姿を現すのである。